ＵＦＯロボ・グレンダイザー第56話パロディ

# 危機を呼ぶエロ博士！Ｒｅｔｕｒｎｓ

裕川　涼

## ●ＰＨＡＳＥ　１　宇宙科学研究所、観測室

広々とした部屋の電子機器のＬＥＤがあちこちで点滅を続けていた。正面のメインスクリーンは、いつも通り、軌道上から星空を捉えていた。天井近くのスクリーンの中で、地球の一部が弧を描き、それを覆う大気圏が青白い光を放っていた。観測質の窓の外はまだ薄暗かったが、所員達は既に定位置について観測を続けていた。

昨夜は外での折衝仕事が長引き、今朝未明にやっと八ヶ岳に戻った宇門は、ユニフォームに着替える時間も惜しんで観測室に立ち寄った。

「みんな、異常は無いか？」

「レーダー、異常無し。静かなものです」

林はレーダーの前でリラックスしていた。

「観測も順調です、所長」

山田の前の電波望遠鏡のスクリーンは、最新の観測データを画像処理したものが全面に出ていた。

「こちらも異常なしです。ベガ星の奴ら、この間の海底基地爆破がこたえたんじゃないですかね」

「いや、油断はできんぞ、佐伯君。スペースアイ計画が却下された今、こまめに偵察を続けるくらいしか手がなくなってしまった。ダイザーチームへの負担が大きいのが気がかりだが……」

「シュバイラー博士があの時援護してくださっていれば……」

宇門は、壁に表示されたトラッキングチャートを見た。そこに表示されているはずの衛星の軌跡が足りなかった。

先日のジュネーブの国際会議で、宇門は、各国で協力して地上を観測し侵入しているベガ星連合軍を見つけ出そうと呼びかけた。その目玉になるのが、軌道上から海の底や地中の異常まで発見することができる衛星スペースアイだった。しかし、ズリル長官が変装した偽者のシュバイラー博士が「宇門はスパイ衛星を上げようとしている」とプロパガンダした。このため、宇門が試験的に上げたスペースアイは、大気圏突入もさせてもらえず、国防軍のミサイルで破壊されて

しまっていた。
「今更済んだことを言っても仕方がないだろう、大井君。それに、シュバイラー博士は次のプランも考えておられるということだ。ただ……」
「どうかしたんですか？」
「新しい宇宙機で使うロケットエンジンの設計図を持って日本に来る予定なのだが、連絡が無いのだよ。アメリカでの会議が終わったら、ニューヨークから直接飛ぶとおっしゃっていたから、昨日の午前中あたりに、東京国際空港に着くはずなんだが……」
「航空機事故の情報は全く入っていません、所長。時間の都合で別の便を使ったんじゃないですか」
ヘッドセットを付けたままで山田が答えた。
「それならそれで、電話で連絡くらいはしてくるはずだが……」
既に朝七時を回っていた。夜の警戒に出た甲児とマリアが、そろそろ戻ってくる時間だった。
『所長、全く異常はありません』
予定通りに、甲児から通信が入った。
『私の方も異常はないわ』
疲れを全く感じさせない、マリアのはつらつとした声が続いた。
「ご苦労だったね。早く戻って休みなさい。昨夜も徹夜で警戒にあたっていて、疲れただろう」
言い終わったとき、電話が鳴った。宇門は、目の前のコンソールにはめ込まれている受話器をとった。
「宇宙科学研究所の宇門です」
『新宿警察署です。宇門所長でしょうか？　スイスのETH（エーティーハー）のシュバイラー博士をご存じですね？』
「ええ、私の恩師ですが、博士が何か……」
『昨夜遅く、泥酔した上にズボンもはかずに街中を歩いていたところを、本署で保護したのですが、今朝になって、宇宙科学研究所の宇門博士のところに行く途中だったと言い出しまして』
「確かに、シュバイラー博士は来日予定です。連絡が無かったので心配していたところでした」
酔っ払って何をやらかしたんだ一体？　と思いつつ、宇門は答えた。
『それならば話が早い。迎えに来ていただけませんかね？　何せ、カードもサイフも盗られてしまっている上、スーツケースの中身もかなり荒らされているようで……。一応、被害届を出してもらいますが、そちらに行くためのの旅費も手元に無い状態なんですよ』
「わかりました。今から迎えに行きます。昼頃には着けると思います」
宇門は受話器を置いた。所員達に電話の内容を手

短に説明する。
「所長お一人で行かれるんですか？」
佐伯が訊いた。
「そのつもりだ」
「スイスでは、シュバイラー博士が既にベガ星連合軍にマークされていたんですよね。博士が日本で被害にあったというのは、もしかしたら所長をおびき寄せるための罠かもしれません。シュバイラー博士には、ご自分でここまで来ていただいた方がいいと思うんですけどね」
「そうであったとしても、トラブルに巻き込まれたらしい先生を助けないわけにはいかないだろう。設計図の話も早くきいてみたいしねぇ」
「じゃあ、念のためこれを持って行かれた方が」
佐伯は、コンソールの下の引き出しから、ホルスターに入った小型のサイクロン銃と発信器を取り出した。宇門は銃を受け取り、ホルスターのクリップを、ベルトの後ろに差し込んだ。この程度のサイズなら、スーツの上衣に隠れてしまってほとんどわからない。発信器の方は、上衣の内ポケットに入れた。
「十分注意してくださいよ。所長の恩師を突き止めたってことは、他にもいろいろ調べられているかもしれませんから」

---

## ●PHASE　2　新宿警察署、ロビー

「おぉ、宇門君、待ちかねとったぞ」
新宿警察署に着いた宇門を出迎えたのは、シュバイラーの朗らかなドイツ語だった。警察署の誰かから借りたらしいＬＬサイズのジャージのズボンに、上等なシャツという、どうにもちぐはぐな衣装のままで、ロビーの応接セットの椅子から立ち上がって手を振っている。
「先生、何があったんですか？」
「宇門所長ですか？」
宇門の質問は、シュバイラーの横に居た刑事によって遮られた。刑事は書類を示した。
「英会話の得意な所員を通訳代わりに何とか調書を作りました。しかし、シュバイラー博士は英語よりはドイツ語が堪能な方のようで、間違いがなければいいんですが」
宇門は書類を受け取った。最初から順に読んでいく。
――東京国際空港に着いてから、スーツケースと設計図を入れたケースを持って、新宿駅に向かった。新宿駅発の特急で茅野に向けて発つ予定だった。その前に、せっかく新宿に来たのだから遊んでからにしよう

と、歌舞伎町に向かった。風俗街を歩いていたら、若い女性二人連れに誘われた。片言の英語でやりとりしながらバーを二軒ばかりハシゴした。その後、一緒に近くのラブホテルで休憩した。やたらと元気の良い女性で、ホテルに着いてからも酒を持ち込んで乾杯していた。酒の強さには自信があったシュバイラーだが、何故か急に酔いが回って、その後のことはよく覚えていない。設計図を入れたケースが見当たらないのに気付いて、探そうとしたことは何となく記憶にあるが、次に気が付いたら警察署の中だった――

読みながら、宇門は、シュバイラーに向かってドイツ語で話しかけ、書かれている内容を確認した。シュバイラーの答えと書類の内容は一致していた。

「ホテルの外観を何とか思い出してもらい、それらしいホテルに片っ端から電話してみたら、三軒目で、荷物を置いたまま支払いもせずに出て行った外国人が居る、という話をききました。とりあえず本人を連れて行って、確認した上で荷物を引き取ってきました。しかし、サイフもカードも盗られていたため、ホテルの支払いはまだですが」

刑事は、上衣のポケットを探り、マッチ箱を取り出し、宇門に手渡した。「ホテルキャッスル」と派手なピンク色で印刷されていて、住所と電話番号も書かれていた。

「仕方がない、後で支払っておきましょう」

「そうしてくださると助かります」

「ところで、こんなことはよくあるのですか」

「ええ。デートに誘って睡眠薬入りの酒で酔わせてからホテルに連れ込んでサイフを盗む、という手口がこの三ヶ月ばかり増えています。ただ、二人組というのは初めてですし、ズボンを持ち去ったというのもきいたことがありませんね。まあ、気が付いても直ぐには追ってこれないようにしたかったのでしょうが。ただ、シュバイラー博士の場合は、平均的日本人と比べて桁違いに酒に強かったため、もうろうとした状態で外に出てしまったのではないかと」

宇宙科学研究所が日本滞在中のシュバイラーの連絡先になっていることを確認し、宇門は書類を刑事に返した。

「今後は気を付けてくださいよ。こちらでも調べてみますが、盗まれたものが出てくることは期待できませんからね」

刑事が去ったのを見て、宇門は立ち上がった。

「先生、まずは昨日のホテルの支払いを済ませましょう」

「しかし宇門君、このままでは外を出歩くにも恰好が

悪いんだが……」
　宇門は、シュバイラーの服を見た。ズボンとシャツが不釣り合いだというだけではなく、靴の代わりに破れたスリッパを履いていた。これでは、人混みをあるいて電車に乗り、蓼科高原まで移動するのは無理である。
「わかりました。では、まず、服を何とかしましょう」

## ●PHASE　3　新宿伊勢丹、紳士服売り場

「うーん、どれも今ひとつだなぁ……」
　宇門が選んだ無難な生地とスタイルのスーツを取り替えながら、試着室でシュバイラーは呟いた。
「濃紺のスーツでは代わり映えしないし、グレーのこれは何だかおとなしすぎるし、ダークブラウンのダブルのスーツは盗まれたものとほとんど同じだ。何かこう、深紅の薔薇の花束を抱えたときに映えるスーツは無いものかね」
　宇門は顔をしかめた。
　個人財産で航空宇宙技術工廠（エアロスペース・インダストリー）を丸抱えできる経済力の持ち主である宇門にとっては、シュバイラーが高級スーツを何着選ぼうと、支払いに全く問題はない。問題があるとすれば、シュバイラーが何の目的でスーツを選ぼうとしているかの方であった。
「深紅の薔薇って、一体何をするつもりなんですか？先生」
「そりゃ勿論、女性に渡すに決まっとる」
「昨日、見知らぬ女性を口説いて散々な目にあったのに、まだ懲りてないんですか……」
　宇門は脱力して壁にもたれたまま、ずるずると床に座り込んだ。
「お客様、ご気分でも……」
　声をかけてきた店員に、ちょっと足が疲れただけだと言い訳して溜息をついた。
　スーツを店員に返して、店の中を見渡していたシュバイラーが次に目を留めたのは、明るい紺色の礼装だった。
「これはどうだろう？」
　シュバイラーが指さした物は、先日、宇門がジュネーブの国際会議場で着ていたものとそっくりだった。
「それを着ることには反対です。第一、今の日本では、高級ホテルのバンケットかディスコにしか行けませんよ、それでは」
　宇門は即座に言った。シュバイラーがそれを着たまま国際会議で宇門とかち合ったりしたら、天文学の

師匠と弟子のはずが、漫才コンビにしか見えなくなる。

「とにかく、別のを選んでください！」

宇門に強く言われて、シュバイラーは再び店内を見渡した。今度は、ショーケースの中のマネキンが来ているスーツをしげしげと眺めた。

「よし、これに決めた！」

シュバイラーが選んだのは白いスーツだった。ネクタイは宇門のものと同じで、紐ネクタイを蝶結びにするシャツとセットになっていた。確かに深紅の薔薇が映えるだろうと思いつつ、それ以上考えるのを止めて、宇門は店員を呼んだ。ついでに靴も揃えたい、ここで着替えるから包装は不要だと告げて、カードで支払いを済ませた。

十分ほどで、ドレスアップしたシュバイラーが試着室から出てきた。

「では、行きましょうか」

「ちょっと待ちたまえ、宇門君。どこかでコーヒーでも飲んでからにしないかね？　どうも、昨日の酒がまだ残っているようで、頭が重いんだよ」

「じゃあ、上のレストランにでも行きますか。研究所に定時連絡も入れなければなりませんし」

宇門は、売り場脇のエレベーターのボタンを押した。

## ●PHASE　4　新宿伊勢丹、某レストラン

シュバイラーは、運ばれてきたコーヒーを美味そうに飲んでいた。窓の外は見渡す限りビル街が広がっていた。

「ところで、実際の被害はどの程度なんです？」

「被害？　ああ、大したことはない。パスポートは無事だ。スーツケースに入れてあったブランド品の着替えは盗られたが、買い直せば済む。サイフとカードも盗まれたが、カードの方は、警察からエルザに連絡してもらってもう使えなくしてある」

「エルザに？」

エルザはシュバイラーの有能な秘書で、公私両面にわたってシュバイラーを助けていた。そのエルザが来日に同行していないことが、宇門にはひっかかった。

「そういえば、エルザは一緒ではないのですか？」

「会議では一緒だったが、終わった後帰国させた。ところで、ひかるさんやマリアちゃんは元気かね？」

シュバイラーの目当てがひかるとマリアだと察知した宇門は、シュバイラーが計画的にエルザを同行さ

せなかったのだと気付いた。この間、スイス行きの帰りにシュバイラー邸で宿泊した時は、シュバイラーはひかるとマリアに手出しをしようとして見事に反撃を喰らっていた。しかし、喉元過ぎれば熱さを忘れるのがシュバイラーの常である。

「スペースアイ計画が頓挫したおかげで、ひかるさんもマリアちゃんも交代で毎日パトロールに出ています。とてもじゃないが、他の仕事を頼める状態ではありません」

宇門は、シュバイラー博士の相手をする暇などありませんよ、という意味をたっぷり含ませた。

今粘っても無理と判断したシュバイラーは、あっさり話題を変えた。

「そうそう、設計図も盗まれてしまったが、特に問題はない。心配することはないぞ」

「問題ない、って、先生……」

「もう一枚の設計図があるからな。この私の頭の中に」

シュバイラーは自分の頭を指さした。

「どこかで誰かが同じ事を言っていたような気がするが……」

「細かいことは気にするな」

シュバイラーは一気にコーヒーを飲みきった。ウェイトレスに手を上げてお代わりを注文する。

「設計なさったロケットエンジンの性能はどの程度のものなんです？」

「そうだな……二基も使えば宇宙空間でかなり自由に戦闘機動ができるぞ。これまでのロケットエンジンとは比べものにならん。普通の宇宙機なら、速度を変えると周回軌道が変わってしまって、戻るのが大変だが、そういうことはほとんど気にせず、自由自在に戦える」

設計のポイントから従来のものとの違いまで、シュバイラーは得意になって延々と話した。

「……凄い。地球上の技術で、そんなことができたんですか」

グレンダイザーからヒントを得て作った光量子ロケットエンジンでも、まだそこまでの性能は出せていない。

「いや、無理だな。設計は光量子の利用を前提にしたものだ。光量子の利用技術は宇門君しか持っておらんから、後は君の仕事じゃよ」

「なるほど。では、研究所に来ていただいて、後は私が……」

言いかけて宇門は固まった。

説明された性能を、ミサイルや軍事衛星の打ち上げ

や軌道上の破壊兵器に転用すれば、地球上で最強の宇宙兵器を持つことができる。どの国で開発されたとしても、第一級の軍事機密になることは間違いがない。運良く国の間で話し合いがついて設計図を引き渡すにしても、軍の護衛か、最低でもＳＰの護衛くらいはあって当然のはずだが、シュバイラーは一人で持ってきた。

「……設計図を持ってくるのに、護衛も無しってのはどういうことです？　永世中立を宣言したスイスだって、傭兵の輸出国だし自軍はあるし、軍事機密レベルの代物なら図面を押さえるはずでしょう？」

「設計図のことは誰にも言っておらん。それに、下手に護衛を頼んだりしたら、何を持ち出そうとしているかがバレるじゃろうが」

「大丈夫なんですか？　機密指定になりそうなものを勝手に持ち出したりして」

「咎められるのは覚悟の上じゃ。スペースアイ計画が失敗したからな。ベガ星相手に頑張っている君を何とか援助したいんじゃよ」

「それは……ありがたいですが……」

「第一、いろいろ引き連れていたのではデートに差し障る」

飲み込みかけたコーヒーを咽に引っかけ、宇門は咳き込んだ。慌てて紙ナプキンで口元を拭った。

「結局そこですか、先生は……」

「まあ、設計図を入れたケースには鍵がかかっているし、そう簡単には開けられん。暗証番号は、ケースを君に渡した後、エルザが研究所に連絡する手はずになっとった。それに、中を見たって、価値のわかる連中はそうそう居ないだろう」

二杯目のコーヒーを頼もうとして挙げかけた宇門の手が途中で止まった。

「開けた連中が意味を理解できずにそのままゴミにしてくれるならいい。だが、価値のわかる誰かの手に渡ったらどうなるんです？」

高性能なロケットエンジンの設計図だとわかったとしても、そのままではエンジンを作れない。エンジンを完成させようとしたら、宇門の知識が必要――ということは、設計図が、それを本気で利用しようとする者の手に渡った場合、次に狙われるのは宇門本人ということになる。

「とにかく、研究所に連絡します」

宇門は席を立ち、公衆電話へと向かった。腕の通信機を使うよりも、電話を使った方が会話の内容が周囲に漏れない。研究所観測室の直通番号に直接かけた。

『シュバイラー博士には会えたんですか』

佐伯が出た。
「博士は無事だ。だが、少々困ったことになっている」
宇門は設計図が盗まれることになった顛末を話した。電話の向こうで、佐伯が笑いをこらえているのがわかった。
『エルザさんから連絡が入っています。所長と連絡がついたら電話を繋ぐようにとのことで、今手配しています』
十秒ほどしてノイズとともに回線がつながった。
「エルザ？　こちら宇門だが、問題が発生した」
『宇門博士、お元気ですか？　シュバイラー博士はどうなさってます？』
海底ケーブル経由で地球を半周する通信にはタイムラグがある。最初のやりとりは、双方が勝手に発言した内容が飛び交った。宇門は一呼吸おいて、エルザの返事を待った。
『問題って？』
「シュバイラー博士が設計図を日本で盗まれた」
『どうせ、シュバイラー博士がまた何かスケベ心でも起こしたんでしょ』
電話の向こうでエルザが笑った。シュバイラーの行動を完全に見抜いている。
『安心して、宇門博士。設計図のケースはダミーよ。中身はニセ物。そっちに行く前から、ニッポンの女の子達と遊ぶんだってにやけていたから、危ないと思ってすり替えておいたの』
「さすがだね、エルザ。シュバイラー博士ときたら、設計図どころかズボンまで盗まれる有様で、間抜けな恰好でこちらの警察に保護されていたよ」
『……何ですってぇ！』
エルザの金切り声に、宇門は受話器を落としそうになった。
『本物の設計図はそのズボンの方よ。マイクロフィルムにして、ズボンのベルトの裏側に縫い込んであったの』
「わかった。何とか調べてみよう」
『私もすぐそちらへ行くわ。本物が誰かの手に渡ったら、シュバイラー博士の責任問題になりかねないもの。運良くすぐに便があったとしても、今から丸一日位はかかるでしょうけど』
プツン、と音がして回線が切れた。
『エルザさんとのお話、済みましたか？』
佐伯が再び電話口に出た。
「済むには済んだが……、至急、誰か一人、特殊バスでこちらに来てくれ」
『わかりました。林君に頼みます』

宇門は受話器を置き、シュバイラーの居るテーブルに戻った。
「昨日誘った女の子達の顔を覚えていますか？」
「顔……そういえば一緒に写真を撮ったが、どこへ行ったかな」
尋問口調の宇門に押されつつ、シュバイラーはポケットを探った。
「どうやら写真も盗られてしまったらしい」
「それなりに周到な盗っ人のようですね。証拠を残すはずもないか……」
「何、実はここに一枚貼り付けてある。儂が女の子の写真をなくすような手抜かりをするわけがなかろう」
シュバイラーは自慢げに、パイプと、タバコの葉を入れた丸い缶を取り出した。回して蓋を開く。蓋の内側に、シールが貼り付けてあった。女子中高生の間で大流行中のプリクラであった。
「お借りしますよ」
その用心深さを図面を守る方に発揮してくれていれば、と、宇門は口に出さずに愚痴った。大体、何で来たばっかりの外国人が日本の女子中高生の流行に染まっているのかと訝りながら、慎重にシールを剥がし、手持ちの金属製名刺ケースの蓋の裏側に貼り付けた。

---

真ん中でシュバイラーが鼻の下をのばせるだけのばした満面の笑みを浮かべ、両側にどう見ても十八歳未満の女性が二人、これまたにっこりと微笑んでいる。
「宇門君、何をするつもりかね」
「彼女達を探してズボンを取り返します」
「新しいスーツも手に入ったし、儂としてはズボンは惜しくはないぞ？」
「先生が良くても私が困る」
「君の体には合わないと思うが？」
「私が着るわけではありません」
宇門は、シュバイラーの耳元に口を近づけ、囁いた。
「本物の設計図がズボンの方に隠されていたんです。エルザが言ってました。誰かの手に渡ったら、シュバイラー先生だって責任を問われますよ」
呆然としたシュバイラーを置き去りにして、伝票をつかんだ宇門はレジに向かった。

## ●PHASE　5　新宿、歌舞伎町

夜にはまだ時間があった。宇門は、ホテルキャッスルに向かった。名前の通り、ヨーロッパの城をモチーフにした外見で、すぐに見つけることができた。フロ

ントに行き、昨夜の騒動を簡単にわびた後、料金を支払った。
「ところで、チップをはずむから、ちょっと教えてくれないか？」
　この手のホテルにありがちな構造で、フロントの人とは直接目を合わさずに、仕切りに作られた小さな隙間から支払いをするようになっていた。その隙間から折りたたんだ一万円札を滑り込ませ、名刺ケースを開いて差し込んだ。
「この写真の女の子たちと話がしたいんだが、彼女達は普段ここを使っているのかね？」
「昨日の子達だね。あなた、警察の人？　それとも探偵？」
　客が気付いていないというだけで、誰が来たかのチェックは怠っていない。
「いや、違う。一緒に入っている名刺を見てくれ」
「研究所……って、何か難しいことをしてるんだね。学者さん？」
「まあそんなものだが、何とかしてこの娘達に会えないかね？」
「何回かここを使ってくれたことはあるがね、あんた、こういう娘が趣味なのかい？」
「そう思ってもらっても結構だが……」

---

　宇門は曖昧に答えた。本当の目的を明かせるはずもない。
「じゃあ、ここへ行ってみれば」
　フロントから、名刺サイズのカードが三枚差し出された。スナックやバーの宣伝用のものである。店の住所はいずれも近い。かなりの確率で、主に活動しているのはその店のある一角だろうと宇門は判断した。
「彼女達と来た客が置いていったものだよ。その店に行けば会えるかもしれないね」
「ありがとう、調べに来たことは黙っていてくれ。機会があったら、またここを使わせてもらうよ」
　追加のチップをはずんで、宇門はホテルを出た。

「おい、宇門君、待ちたまえ」
　ホテルを出て、繁華街に向かって歩き始めた宇門を、シュバイラーが追ってきた。
「先生、ここからは私に任せてください」
「そういうわけにはいかん。儂の失敗のせいだからな。手伝わせてくれ」
「先生の顔は既に女の子達にばれています。顔を見せたら昨日のことがあるから、逃げられてしまう」
「しかしね、宇門君……」
　残念そうな顔をしたシュバイラーに構わず、宇門は

内ポケットから発信器を出して、シュバイラーの真新しいスーツのポケットに突っ込んだ。
「もうじき、所員の林がこちらに来ます。一緒に研究所に行ってくれませんか？　そうそう、研究所に行けば、ひかるさんやマリアちゃんにも会えるかもしれませんね」
　ひかるとマリアへの後ろめたさを感じて、最後の方は小声になった。それでも、あの二人なら、今度も何とかするに違いない。
　失敗の後始末と、ひかるやマリアに早く会えるということを天秤にかけて、迷って立ち尽くすシュバイラーをその場に残して、宇門はさっさと人混みに紛れた。

## ●PHASE　6　歌舞伎町、繁華街

　金曜日の繁華街は、終業時刻が近付くにつれて、明日が休日なので遊んでから帰ろうという人々で混雑し始めていた。
　シュバイラーを嵌めた女の子達が今日も相手を探しているならば、彼女達が誰かを相手に決める前に見つけなければならない。今日の相手が決まってからでは、発見も介入も難しくなる。

---

　もらった宣伝カードの店が開店した直後に、宇門は、店員の買収を試みた。三軒続けて訪問し、プリクラの写真を見せて、この娘達と話がしたいので見かけたら教えてくれ、と頼んでチップを渡した。宇門としては、正直に要望を述べたに過ぎない。しかし、そんな台詞を聞かされた側には、宇門が援助交際の相手を忘れられず、写真に移った初老の男を出し抜こうとしているスケベオヤジにしか見えていなかった。このため、どの店の店員も苦笑しながら、来たら教えてやると約束したのだった。
　宇門は、その店のある一角を歩き回った。歩きながら手帳を開いて簡単な地図を作り、店の名前と種類を書き込んだ。普段は蓼科高原の研究所にこもっており、仕事で上京しても打ち合わせは赤坂か六本木あたりで、新宿に来たことはほとんどなかった。まずは、街の様子を知る必要があった。
　デートを装って酒に誘うのが手口なら、行き先は、女性同伴で入りやすい場所に限られる。よって、ホステスのいるクラブは全て除外してもかまわない。小一時間ほど歩き回って、周辺三ブロック分の地図が完成した。ホステスが居そうな店には全て×印をつけた。地図を作りながら、客を待っているらしい女性が写真の人物ではないか、さりげなく確認した。何度か

本当に誘われそうになったが、手帳を開いて熱心に書き込みを始めると、相手の方で勝手に何かの取材中だと勘違いしてくれた。

何往復目かした後、「バー　コルナス」と書かれた看板の脇に立っている二人連れが目に入った。宇門は写真を出して見比べた。昨夜のシュバイラーの相手に間違いなかった。二人はサラリーマン風の男を誘い、あっさり断られていた。

宇門は腕の通信機で、新宿に向かっている林を呼び出した。

「シュバイラー博士を誘った女性を見つけた。これから調べてみる。シュバイラー博士には発信器を持たせてあるからピックアップしてくれ」

『了解。でも、大丈夫ですか？　今度は所長が被害者になるんじゃ……』

「それは何とかする」

長々と通信している時間は無い。宇門は一旦通信を切った。ぶらぶらと、入る店を探しているふりをしながら二人に近付いた。

「一緒にお酒飲まない？」

案の定、二人は声をかけてきた。

「いいね、ちょうど話がしたかったところだ」

今度も嘘は言っていない。だが、大抵の――二人の体目当ての――男達も、最初は決まって「話をしよう」と誘う。これが幸いした。宇門は全く怪しまれることなく、二人を連れて店に入ることができた。

## ●PHASE　7　歌舞伎町、バー・コルナス

ショートカットで背の高い方はケイ、ロングのストレートヘアの方はレナ、と名乗った。宇門の方もとりあえず名前を告げた。店に入って、奥のテーブルの席に座った。

話がしたい、と言ってはみたが、宇門はたちまち話題に困ることになった。欧米人方式で、一通り社交辞令で二人を褒めてみたが、後が続かない。いきなり本題を切り出したら、逃げられるのが目に見えている。普通の男性なら、職場の愚痴でもかみさんの悪口でも言うところだが、生憎宇門はどちらにも縁がない。仕事の話をしたところで、一般のサラリーマンの業務内容とはかけ離れているため、話が通じるとも思えない。リアクションホイールで衛星の姿勢制御をするとか、銀河系の降着円盤ができるメカニズムとか、宇宙に分布するミリ波の電波源といった話題を出せば、宇門が一方的に二人に講義するハメになる上、話を聴く側にも予備知識が要る。つまり、根本的にこの手の

話題はデートには不向きということである。
二人はここの常連で、何種類かのボトルをキープしていて、宇門にも水割りを作って勧めた。だが、昨日のシュバイラーの件もあり、二人が作ったものを飲むのは、何を混ぜられているかわからないという危険があった。かといって、全く飲まなければ、カモにならないと思われて油断してくれないだろう。カクテルでも頼もうかとメニューを見たが、店のバーテンもグルである可能性を考えて思いとどまった。メニューを見て考えた末に、宇門は、ワインをボトルで注文することにした。銘柄はともかく新品を持ってこいと念を押し、栓を抜こうとするウェイターを止め、ソムリエナイフを借りて自らコルク栓を引き抜いた。コルク栓の上からシールされている状態で何かを混ぜるのはまず不可能だから、栓を抜いた後に入れられないように注意していればそれで済む。科学者は手品師ではないから、目の前で細工をされても気付かないことがあり得る。安全のためにはボトルに相手の手を触れさせない事だ――。
一服盛られることを警戒したため、宇門は、ワインの瓶を片時も離さず抱え、グラスを手に持ったまま、飲みながら二人の話の聞き役に回ることになった。
二人は、流行のファッションやアクセサリーの話、人気のテレビドラマの話を楽しそうにしていた。その話を聞き、適当に相槌をうちながら、愛想笑いを浮かべつつ宇門はグラスを口に運んだ。この二人から話を訊きだすまでは、不審がられることだけは避けなければならない。
「ところで宇門さんって、お仕事は何をなさってるの？」
「いろいろ、機械を作ったり動かしたりしている」
やっていることを簡潔に答えた。簡潔すぎて話が続かない。間を置いてケイが訊いた。
「ものすごーくお酒好きなんでしょ？」
「……え？」
ワインのボトルは空になっていた。レナがウェイターに手を上げて追加注文をしようとした。ここで変なものを飲まされてはたまらない。宇門は、慌てて、さっきとは違う銘柄のワインを、今度も新品のボトルで持ってくるように伝えた。
「やっぱり。アルコールなら何でもいいって感じ？」
「そういうわけでもないが……」
銘柄を問わずに注文はボトル単位、店が出したつまみにも全く手をつけていない。一服盛られたくない一心でそうしていたのだが、これでは、実はそれほど酒好きではないのだと主張したとしても、説得力のか

けらもない。
「そういえば、さっきからあんまり喋らないわね」
「実は緊張してるんじゃないの？　遊び慣れてるようにも見えないし」
レナが突っ込んだ。
緊張しているのは、どうやってズボンの行方を訊き出そうかと考えていたからだが、遊び慣れていないという指摘は図星だった。返事をするかわりに、宇門は、ウェイターが持ってきたワインのボトルからコルクを乱暴に引き抜いた。まだ使っていなかった大きめのグラスを取り、八分目まで注いだ。
「今日はこれだけあればいい」
別のものを勧められないように、前もって予防線を張った。言った手前、飲まないわけにもいかず、宇門はグラスを空にした。
「次は樽で持ってこいって言いそうな勢いね」
「冗談じゃない……」
宇門は溜息をついた。続けて少し話をしたが、ここでこのまま居ても、本題を切り出すのは難しそうである。
「で、君たちと込み入った話をするときはどうすればよいのかね？　だいぶ飲んだし、そろそろ場所を変えた方がよさそうに思うのだが……」

---

「じゃあ、それを飲み終わったら行きましょうか」
ケイがボトルを指さした。宇門は、半分ほど残っていたワインを一気に飲みきって、立ち上がった。
「勘定は全額払っておく。行こうか」

## ●PHASE　8　ホテル・パイレーツ

誰かに見られたら、もはや言い訳のしようのない恰好だった。両側にひかる程度の年齢の若い女性を二人侍らせ、肩に手を回し、右手には新品の酒瓶。どこからどう見ても、青少年保護育成条例違反である。
ホテルに入ってからも酒盛りだったというシュバイラーの話を聞いていたから、やはり誰かの手を経たものは口にできない。バー・コルナスの入り口に置いてあった新品のブランデーのボトルを、勘定を済ませるときに買ってそのまま持ち出すことにしたのだった。
パパラッチに追いかけられるような立場ではなかったことを、宇門は神に感謝した。信じていなくても感謝だけする分には、神だって文句は言わないだろう。
先払いの料金をカードで支払い、鍵を受け取って、エレベーターで三階に上がった。部屋はそれほど広

くはなかった。部屋の入り口は施錠した。これで直ぐに逃げられることはない。

「水割りでも作りましょうか」

備え付けの冷蔵庫から氷を取り出し、グラスに入れながらケイが言った。

「いや、このままで構わない。割った方が良ければ君たちはそうすればいい」

宇門は、洗面所の水でグラスを洗い、そのままブランデーを注いだ。耐ハイでも作るために用意されたものらしく、それなりの容量があったが、勢いあまってもう少しでグラスから溢れそうになった。ついでに、ケイとレナのグラスにも注いだ。

水滴を見ていると、海外旅行中に瓶詰めコーラを頼んだら、洗ったカップと一緒に出され、カップについていた水滴の方が原因で腹をこわしてえらい目にあったことを思い出した。そのような場所では、氷も危険だから使わないのが鉄則である。だが、ここは日本だ。水道水に細工される可能性はさすがに無いだろうと判断した。

とりあえず、乾杯してグラスを空にした。蒸留酒（ブランデー）のアルコール度数は高い。喉を焼く感覚に、宇門は咳払いして息を整えた。これで、一服盛られたこと以外の、シュバイラーが昨夜やったことは大体辿ったことになる。あとは、本格的に酔いが回る前に訊くべきことを訊いて、必要なら研究所に連絡を入れて応援を頼み、どこかで休んで酔いを醒ましてから戻ればいい。

「さて、訊きたいことがあるんだが……」

話を切り出した瞬間、部屋の扉を叩く音に遮られた。

「俺だ、ここを開けてくれ！」

「ヨウスケ、どうして？」

レナが入り口に向かって走った。

「知り合いか？」

立ち上がった宇門は、入り口の脇に立って様子を窺った。レナが鍵を外す。若い男が走り込んできた。後ろにスーツ姿の男が続いた。

「助けてくれ！」

若い男が悲鳴を上げた。後ろの男が持っているものが拳銃、と見た瞬間、宇門は正拳突き（ストレート）を喰らわせていた。若い男をかすめて後ろの男の顔面にきれいに入った。倒れる男に構わず、内開きのドアを思い切り蹴りつけた。後から入ってこようとしていた二人目が、タイミング良く腕を挟まれて悲鳴を上げた。最初から、二人一組（ツーマンセル）でフォーメーションを組んでくる相手を想定して対処したのがうまく決まった。二人目がひるんだ隙に、宇門はドアを閉めた。鍵をかけ、

チェーンを嵌める。ドアは金属製で、それなりに強度はある。
「時間は稼げるだろう」
宇門は、倒れている男を見て、顔を引っ張った。変装はしていない。
「地球人か……」
「助かったぜ。でも、あんた、写真の……」
ヨウスケが言った。
「写真？」
ヨウスケは倒れている男の胸を見ていた。宇門は、男の上衣の内ポケットを探った。出てきたのは礼装姿の宇門の写真だった。宇門は写真をテーブルの上に置いた。
「この間の国際会議の時のものか……」
宇門は、三人を順番に眺めた。
「どういう事か、説明してもらいたいが」
誰も答えない。
「では、こちらから訊こう。この人を知っているな？」
宇門は、名刺ケースを取り出して開いた。シュバイラーが写ったプリクラを見せる。三人の顔が引きつったのを見て、続けた。
「昨日この人に何をしたか、全部話すんだ」
「……そいつに頼まれたんだ」

---

ヨウスケは、倒れている男を指さした。
「その外国人の写真を見せられて、図面か、図面の入っているケースを盗んでくれって。だから、油断させるために、ケイとレナに頼んだんだ」
「普段からこんなことをしているのか？」
ケイもレナも首を振った。
「普通にお酒飲んだり話をしたりしてるだけ。ホテルへ行くこともあるけど、盗んだりは……」
「謝礼をたっぷり払うとでも言われたのか？」
ヨウスケが無言で頷く。
「金を受け取りに行ったんだ。そしたら……」
「この有様、か。三人とも殺されるところだったな」
「あの……」
「何だ？」
「このままじゃ駄目だからこいつを探せ、って言ってた。その写真を見ながら……」
ヨウスケは、テーブルの上の写真を指さした。
「エルザ、もうちょっと手抜きしておけよ……」
宇門は呟いた。二人組が手に入れた図面はニセ物だが、出来のいいニセ物だ。見ただけでは余程の専門家以外はニセと見抜けないようにした上に、念を入れて、宇門に渡す必要があるということの信憑性を増すために光量子利用の部分まで書かれていたに違いな

い。相手がベガ星連合軍ならともかく、これほど早く宇門が地球人のターゲットにされることになった理由は、他に考えられない。
「もしかして、図面を探してるの？」
「設計者が無事なら図面はまた作れる。設計者のここに有るそうだ」
宇門は、レナに向かって自分の頭を指さした。
「……で、ズボンを何処へやった？」
「は？」
ケイもレナもぽかんとした表情で宇門を見つめた。
「昨日、この人から盗っただろう？」
「盗った、っていうかその……」
レナが口ごもった。
「あのさ、部屋に入るなりズボンを脱いで二人まとめてベッドに押し倒そうとしたわけよ、そのオッサンは。だけど、睡眠薬入りの酒の効き目の方が早くてさ。あまりにせっかちなスケベぶりにこっちも呆れ果てて、お仕置きのかわりに脱ぎ捨てたズボンを丸めてゴミ置き場に投げ込んだわけ」
ケイが早口でまくし立てた。
その光景を想像して宇門は部屋の中で天を仰いだ。結局自分から脱いだんかい、と心の中でシュバイラーにツッコミを入れた。

---

「どこに捨てたか教えてもらえるかな」
宇門は手帳を開き、夕方歩き回って作った手書きの地図を示し、ボールペンを渡した。ケイが、捨てた場所を赤インクで書き込んだ。
「何でズボンなんか探してるの？」
「彼の親父さんの形見なんだ」
嘘を言ったってどうせバレやしない、と思いながら、宇門は手帳をポケットに入れた。ゴミの収集日まではメモしておかなかったから、後で見に行かなければならない。
「俺達、これからどうすれば……」
「この先襲われても自力で逃げ切るか、警察に駆け込んで自首した上で保護してもらうか、好きなようにしろ」
ニセ物の設計図は既に奪われたが、奪った連中の背後関係はわからない。本物の設計図は目下行方不明である。本物を回収するか、回収できない場合は利用されないように消滅させる以外に、機密を守る方法はない。三人組の相手をしている暇などない。
下手に警察に通報したら、逆に身動きがとれなくなる。襲ってきた相手が通報することもないだろうと考え、男をそのままにしたまま、宇門は部屋の入り口に向かった。チェーンを外し、鍵を開けた。外に出

ようとしてふらつき、ドアにぶつかって派手な音を立てた。短時間にがぶ飲みした酒が急に回ってきた。大量に飲んだ後に立ち回りをやったのもまずかった。宇門は時計を見た。前の店を出る時と、ホテルに入ってからと、立て続けに飲んでから三十分以上が経っていた。

「大丈夫？」

レナは宇門に肩を貸した。

「酒豪に見えてたんたけど……」

宇門は苦笑した。元々飲んでも顔に出ない上、今日の飲み方では、そう思われても仕方がない。

ケイも追って来た。

「地図なんか作ってて……さっきの殴り合いといい、宇門さんって本当は何をやってるの？　探偵さん？」

ケイが訊いた。

「天文学者だ」

どう考えても、信じてもらえそうな状況ではなかった。

## ●PHASE　9　新宿区

宇門が危なっかしい足取りでホテルの外に出た時、林から通信が入った。

『所長、済みません。やられました。シュバイラー博士が……』

「何があったんだ？」

『合流直前に、襲撃を受けて、連れ去られました。荷物を積み込んで、乗り込もうとしたところを……』

「そっちもか。相手は？」

『おそらく、ベガ星連合軍』

「何だって？　本当に相手はベガ星連合軍なのか？」

『武器が、地球のものではありませんでした。僕がちゃんと反撃していれば……』

「無茶をしてはいかん。それに、林君は大丈夫なのか？」

『かすっただけです。でも、そっちも、ってことは所長の方も……』

「こっちはベガとは別らしいが……とにかく合流しよう。私の位置はわかるな？」

『その通信機があれば。ただ、繁華街なので特殊バスで行くと、人混みで動きがとれません』

「わかった。……何とか西新宿へ向かってみる」

電柱に寄りかかったまま、左腕の通信機に向かって話す宇門を、ケイとレナが驚いて見ていた。

通信を終えた宇門は、ガード下をくぐり、西新宿方面に向かった。肩を貸そうとするケイとレナを突き

飛ばすように振り払った。別々の理由で狙われている以上、まとまって一緒に居るのはお互いに危険なだけである。

「ちょっと待ってよ！」

宇門は追ってくる三人を引き離そうとしたが、走るのはとても無理で、真っ直ぐに歩くことすら困難だった。目を開けたままでは目が回って倒れそうになり、目を閉じてもふらつく。ビル街の広い歩道を歩きながら、ビルの壁に寄りかかったり、車道側の街路樹に凭れて休んだりしていたが、新宿中央公園手前の交差点のあたりで力尽きた。

宇門は、左手を街路樹について俯き、右手を口に当てて胸を波打たせた。立っているのがやっとだった。

通信機の電波を辿ってきた林が、宇門のすぐ脇に特殊バスを停めた。ドアを開けて駆け降り、ガードレールを飛び越えた。

「所長、一体何が……」

林は、倒れそうになっている宇門の後ろに立っていた三人を見た。

「所長と一緒に居たのは君たちか？」

「そうだけど。あの……通信で言ってた林さん？」

ケイが訊いた。

研究所でも宴会やパーティーは普通にやっていたし、所員共々仕事の付き合いで外で飲むこともあったが、かなり飲んでも、宇門は、悪酔いして苦しむ姿を所員の前で見せたことなどなかった。

「お前達、所長に一服盛ったな！」

「何もしてないって！」

凄い剣幕で迫った林に負けない勢いで、ケイが怒鳴り返した。気圧されて黙った林に、ケイは、最初から宇門は酒に目がないとしか思えない様子だったし、襲われたところを助けられたのだと語った。

「滅茶苦茶飲むにしたって、限度ってもんがあるでしょうが……」

救急車を呼ぶべきかどうか迷いながら、林は宇門の背中をさすった。

「……気分が悪い……吐きたい……」

喘ぎながら宇門は言った。咳き込むようにして少し吐いた。

「確かに、一服盛られはしなかったんでしょうが……酒に弱い人が同じ事をやったら、今頃は死んでますよ」

「話をきけばそれで済む筈が……うぐっ……」

襲われたのは想定外だった、と宇門は言おうとしたが、吐き気がこみ上げて言葉にならなかった。

林は、固形物が何も混じらない液体を吐いている宇

門の背中をさすった。
「所長、何も食べずに飲んでたんですか……」
何度か吐いた後、宇門は歩道に座り込んでガードレールに凭れた。吐いても楽にはならなかった。吐き気は一向におさまらず、冷や汗も止まらない。
「病院に行きますか？　その方が早く楽になる」
エチルアルコールの解毒薬はないので、体の処理能力を超えた場合は、輸液で薄めながら排泄させるか、透析で除去するしかない。研究所に戻ればその程度の設備はあるが、さすがに特殊バスには積んできていない。
「いや、大丈夫……だと思う」
宇門は首を振った。
「ズボンは見つかったんですか？」
林は訊いた。エルザとの会話は、観測室に居た全員がモニターしていたから知っている。
胸のポケットを探ろうとする宇門を見て、林は、宇門の手帳を引っ張り出した。
「捨てた場所、そこに書いてあるから」
レナが言った。
林は、ペンライトで照らして手帳を確認した。場所はすぐにわかった。見に行くのは簡単だが、別の誰かに追われている上、泥酔して動けなくなった宇門をそのままにはしておけない。
「所長を乗せる。手伝ってくれ」
林は、ヨウスケに手伝わせて宇門を起こし、特殊バスの左側の席に押し込んだ。
「僕たちはズボンを探しに行く。君たちは早く帰りなさい」
林は、新宿東口に向けて特殊バスをUターンさせた。

## ●PHASE　10　新宿歌舞伎町、街角

手帳に書かれた場所はすぐに見つかった。探せるものなら探し出そうと、林は特殊バスを降りた。
金網で覆われた巨大なボックスの八分目までを可燃物のゴミ袋が埋めていた。貼り付けられた表によると、今日は金属やガラスといった埋め立てゴミの収集日で、可燃物の収集は明日土曜日だった。
清掃局の分別回収は徹底しているから、埋め立てゴミに衣類が混じっていても、回収はしないで残していく。昨晩、埋め立てゴミと混じってズボンが突っ込まれ、今朝、埋め立てゴミが収集されてから上に可燃物が積み重ねられたのなら、ズボンが残っているとしてもゴミの山の一番下ということになる。

「とても一人じゃ無理だな……」
林はつぶやいた。ボックスからゴミを出したりしたら、咎められるに決まっている。実のところ、この生ゴミの山に分け入らなければならないのであれば、ほとんどバイオハザードの世界だから、人手よりもむしろ防護服が欲しかった。
林は特殊バスに戻り、宇門を揺り起こした。
「ゴミが多すぎてどうにもなりません。明日の収集の時に確認します」
今焦ってゴミの山を発掘しなくても、明日になれば収集車が来てごっそり持っていく。下の方から何が出てくるかは、その時にわかる。
「……う、うん……」
林の呼びかけに一瞬だけ目を開けたが、宇門はまた直ぐに目を閉じてしまった。今何を言ったとしても、酔いが醒めたら記憶など飛んでいるに違いない。
林は、ゴミ置き場が見える場所にある駐車場に特殊バスを停めた。収集の時間がわからない以上、清掃局の車がやってくるまで見張りを続けるしかなかった。

林は、一睡もしないで朝を迎えた。
三十分に一度、冷や汗を流して苦しんでいる宇門を起こして様子を見た。限界を超える量を飲んだことは確かだったから、反応が無くなれば昏睡に陥ったと判断して問答無用で病院に運ぶつもりだった。しかし、宇門は毎回何かしら答えた。あたりが明るくなり始めた頃、宇門は少し落ち着いて眠ってしまった。
宇門に声をかけたついでに、林は、特殊バスの屋根のアンテナを上空に向けて、研究所と定期的に連絡をしていた。シュバイラー博士の拉致を知った研究所は、徹夜で警戒態勢に入っていた。いざという時のために戦闘チームはパトロールに出さずに待機させ、観測室メンバーだけで、レーダーや宇宙望遠鏡を監視していた。林が抜けて、急遽レーダーを担当することになった大井からは、「異常無し」の返事が続いていた。
――朝六時半。
林は、近くのコンビニに買い出しに行った。パンや飲み物を買って戻った。ゴミの収集までにはまだ時間がある。林は、パンをかじりながら、カラスが舞うゴミ置き場を見ていた。宇門は、倒したシートに体を預けて眠ったままである。
八時を過ぎて、人通りが増えた頃、ゴミの収集車が来た。林は、特殊バスを降りて、ゴミ捨て場に走った。作業員が二人で、収集車の後ろに、次々にゴミ袋を放り込んでいく。林は、ゴミ袋に目をこらした。ゴミを捨てに来た人が袋に入っていないズボンを見て、持っ

てきたゴミ袋に一緒に入れたという可能性もある。
　最後までゴミ袋を見ていたが、それらしいものは見当たらなかった。ゴミ捨て場は空になったが、ズボンは出てこなかった。
　林は、特殊バスに戻った。宇門は座席を元に戻し、両腕を組んで前のダッシュボードに置いて、頭を抱えるような恰好で顔を伏せていた。
「ズボンは見つかりませんでした、所長」
「持ち去られたと考えるしかないだろう、捨てたのが本当なら……」
　顔を上げずに宇門は答えた。
「これからどうします？」
「ゴミ捨て場のズボン、しかも日本人には合わないサイズだ。普通の人なら持っていったりはしない。一番拾いそうなのは……そのへんのホームレスにでも訊いてみるしかないんじゃないか」
「彼らがまとまって居るのは新宿中央公園ですね。行ってみましょう」
　林は、駐車料金を機械に突っ込んで、特殊バスを再び西新宿へと向けた。

## ●PHASE　11　新宿中央公園

「所長、着きましたよ」
　林に言われたが、宇門は、頭痛と吐き気と全身の倦怠感がひどくて、すぐには動けなかった。乗物酔いの強烈なのと、インフルエンザの高熱の頭痛が同時にやってきたような気分だった。
「だいぶお酒が残ってるようだし、聞き込みには僕が行きましょうか？」
「……まだ酒臭いかね、そんなに？」
「ご自分じゃわからないんでしょうけどね。それに、顔色も悪いですよ」
「二日酔いは病気ではないからな。仕事をさぼる理由にはならん」
　宇門はゆっくりと特殊バスから降りた。気持ちが悪くて体に力が入らず、動くのが辛い。
「研究所との連絡はどうなってる？」
「定期的にやってますが、今のところ異常無しです」
「スイスでも、シュバイラー博士はベガ星連合軍に襲われたが、殺されはしなかった。今度の目的は何だろうな……」
　林が特殊バスの後ろに回った。扉を開け、シュバイラーの海外旅行仕様のスーツケースから上衣を取り出した。
「聞き込むにしたって、上衣を見せた方がわかりやす

いでしょう」
「そういえば、荷物は積み込んだと言ってたな」
「……覚えてたんですか」
林は先に立って歩き出した。
「その前に水を飲んでくる」
宇門は、公園入り口近くの公衆トイレに向かった。
「水なら、そんなところで飲まなくたって、さっき買ってきたのがありますよ」
林は慌てて特殊バスに引き返し、ペットボトルを手に宇門を追った。
「それは必要無い」
宇門は、トイレの洗面台の蛇口をひねり、水を出した。むかついて戻しそうになるのをこらえて、手で掬って飲み込んだ。コップ二杯分程度を飲むのが限界だった。悪寒を感じた瞬間、飲んだ水を全部吐いてしまった。
「本当に大丈夫ですか？」
追ってきた林が、宇門の背中をさすった。答えずにもう一度水を飲み、体が反応するのに任せて一気に吐き、口をすすいで水を止めた。
「受け付けないのに無理して飲んだって、具合が悪くなるだけじゃ……」
「そうでもない。これでどうにか動けそうだ」

---

二回もやれば、胃の中をきれいに洗ったのと変わらない。相変わらずひどい頭痛と吐き気はあったが、溜まっていた胃液まで全部出してしまったので、さっきよりはかなり楽になっていた。
「……ホントに輸液の準備でもしてくりゃ良かったな」
「昔の経験からすると、午後になれば水くらいは喉を通るようになるはずだ」
「昔？」
「シュバイラー博士に付き合わされると、大抵翌日はこんな感じだった」
「シュバイラー博士本人が居ても居なくても結果が変わらないじゃないですか」
「……全くだ。とにかく話をきいて回ろう。誰か知ってるかもしれん」
宇門はブルーシートで覆われた段ボールハウスが並ぶ方向に向かって歩き出した。
「で、何と言って探すんですか？」
「持ち主の親父さんの形見、だ。盗まれたものだが適当な価格で買い戻すつもりがある、有用な情報提供にも謝礼を払う準備がある、とね」

宇門と林は、段ボールハウスの住人を端から訪ねて

歩いた。上衣を見せ、これと同じ生地のズボンが捨ててあったのを拾った人は居ないか、あるいは拾った人を知らないか――ひたすらこれだけを訊いた。普通に知らないと答えた人、あからさまに不審者を見る目で二人を見た人、反応は様々だった。疑う相手には、「持ち主の外国人の知り合いで、今は本当に困っているのだ」と宇門が熱心に説明した。普段の紳士然とした物腰に加え、蒼白で憔悴した様子――単なる二日酔いだが――であったことが、本気で困っているのだという印象を相手に与えることなった。十数人ほど尋ねた時、手がかりが得られた。

「……確かに拾ったのは俺だよ。だけど、大きすぎて体に合いそうになかったし、何だか高級そうでまだ使えそうだったから、知り合いに渡したよ」

宇門より年配に見える男が答えた。

「誰にいつ渡したのか教えてもらえないか」

「ホームレスの支援団体の人だよ。吉住さんっていう……。事務所は東口の雑居ビルの五階。新宿生活者の会、っていうのがあるんだ。拾って直ぐだったから、昨日の午前中だったよ」

ビルの場所を訊いて、宇門は謝礼を手渡した。こんなにもらっていいのかと恐縮して驚く男をそのままにして、宇門と林は特殊バスへと走った。

---

## ●PHASE 12　新宿生活者の会、事務所

雑居ビルの五階の事務所入り口は、普通のアパートのドアのように見えた。『新宿生活者の会』と、白地に黒の小さなネームプレートが出ていて、ドアの両側に、「路上生活者に支援の手を」「難民救済のための寄付を集めています」といった内容のポスターが貼ってあった。林がノックをすると返事があった。

中は雑然としていた。キャビネットが置かれ、作業机がいくつか並んでいた。一番手前にカウンターがあり、その脇に古びた応接セットがあった。

作業を中断してカウンターの所にやってきた男に、宇門は挨拶をし、名刺を渡して目的を告げた。

「吉住さんという方がこちらにいると訊いたのだが……」

「吉住なら、朝イチで品川の方に行ってます。もうすぐここにくるはずです。そちらでお待ちください」

宇門と林は、応接セットのソファに座った。

「事務所はここだけですか？」

「ええ」

「寄付金だけならともかく、難民支援をやるには手狭じゃないんですか？」

壁には、難民救済のための物資の寄付を呼びかける

ポスターもあった。
「古着や毛布が主ですが、ここには、そうたくさんは置いておけないので、品川に倉庫を借りています。今朝、吉住が出かけた先もそこでして」
「所長、もしかして……」
「既に運ばれてしまったのかもしれんな」
廊下を歩く靴音が聞こえ、ドアが開いた。三十半ばくらいの、痩せた男が入ってきた。
「吉住君、お客さんだよ」
さっきの男が声を掛けた。宇門は立ち上がった。名刺を渡し、シュバイラーの上衣を見せ、これと同じ生地のズボンを受け取らなかったか訊いた。
「確かに、昨日、受け取ったものと同じです」
「今、ズボンはどこにありますか？」
「品川埠頭の倉庫に、他の援助物資と一緒に運んできたところです」
「場所を教えていただけますか」
「かまいませんが、どうしてまた……」
宇門は、知り合いの大事な品が盗まれて捨てられてしまったので探しているのだ、と説明した。新宿中央公園で散々同じ説明をしてきたから、嘘もすらすらと出た。
吉住は、傍にあった紙に簡単に地図を書いて渡した。
「フィリピン経由でアフリカ等に送っています。窓口になっているのは、東亜国際物流っていう貿易会社です。電話番号も書いておきます」
宇門は地図を受け取った。運び込んだ段ボールの目印も書かれていた。
「今日の夕方出航する便でまとめて送ることになっているはずです。今朝運んだ分だけでも、確認が済むまで送るのを延ばせないか、頼んでみますよ。ついでに、あなたたちが行くことも伝えておきますから」
宇門と林は、礼を言って事務所を出た。

## ●PHASE 13 東京都内

特殊バスに戻った宇門と林を出向かえたのは、研究所からの緊急呼び出しだった。運転席のランプが点滅してブザーが鳴り、「こちら研究所、応答願います」という呼び出しが繰り返されていた。
宇門は通信機のマイクを取った。
「何かあったのか？」
『所長、さっきからベガ星連合軍が通信に割り込んできてます。所長を出せ、と』
「わかった。こちらに転送してくれ」

宇門は、特殊バスの後ろに回った。扉を開けて、機材の電源のスイッチを入れた。屋根のアンテナが上空を走査した。備え付けのディスプレイに、研究所のスクリーンの映像が転送されてきた。小型のヘッドセットを耳にかけ、研究所を呼び出した。
「画像、音声ともに感度良好だ」
『こちらも大丈夫です』
佐伯が答えた。
『宇門博士だな？　私はベガ星連合軍科学長官ズリルだ』
アイパッチの男が画面に出た。
「シュバイラー博士を誘拐したのはお前達か？」
『そうだ。スペースアイ計画は残念だったな』
「貴様……目的は何だ。シュバイラー博士を返せ」
ズリルは答えずに目配せした。カメラが切り替わり、ベガ星兵士に両脇を押さえつけられたシュバイラーの姿が出た。
『シュバイラー博士はこの通り無事だ』
『宇門君、こちらの様子がわかるのか……』
カメラの位置がわからないのか、シュバイラーはあちこち見回していた。
「先生っ！」
『スイスで狙われたばかりなのに、性懲りもなくわざわざ日本へ遊びになど来るからだ。だが、儂の目的はグレンダイザーだ。すぐに返してやるさ。気の利いた方法でな』
ズリルの高笑いが二日酔いの頭に響いて、宇門は顔をしかめた。
『おや、顔色が悪いようだが……まあ、楽しみにしておれ』
通信はそれで切れた。宇門は、ヘッドセットの電池ケースをシャツのポケットに入れてクリップで留めた。装置の電源をそのままにして後ろの入り口を閉め、助手席に乗り込んだ。
「データリンクを維持してくれ。戦闘チームはいつでも出撃できるように待機せよ」
『了解』
「林君、とりあえず品川に向かおう。ベガ星の動きも気がかりだが、向こうから来るまではどうにもならん」

## ●PHASE　14　品川埠頭

「地図によると、このあたりのはずですが」
林が、品川埠頭の倉庫が建ち並ぶ一角で特殊バスを停めた。海側は都の施設で、それより少し陸の方に、

様々な企業が一時的に荷物を集配するための倉庫や設備が並んでいた。
　宇門はバスを降りた。倉庫やコンテナ置き場が雑然と並んでいた。あたりを見回すと、入り口に『東亜国際物流』と書かれた倉庫が見つかった。
「どうやらあれらしい」
　宇門が指さした方向を林が見た。
「確かに。でも、閉まってるみたいですよ」
「近くに事務所でもあるんじゃないかな。行って探してみよう」
「私も行きましょうか？」
「いや、林君はここで待っていて、研究所との連絡にあたってくれ」
　宇門はシャッター脇のドアの前まで行って、軽くノックした。
「どうぞ」
　狭い事務室には、作業服姿の男が一人居た。
「電話で連絡をもらってるよ。運び込んだ荷物は倉庫に置いてあるから中を見て探してくれ」
　男はそう言って、倉庫につながる扉を開けた。
「今日は休みだから、多分、そのままになってるんじゃないかな」
「ありがとう、助かります」

---

　宇門は、倉庫の中を見回した。倉庫の半分以上は、コンテナが、人一人が通れる隙間を空けて並べられていた。残りの部分は移動式の棚になっていて、プラスチックパレットに載せられた段ボール箱が積み重ねられていた。棚を寄せて通路をつくればフォークリフトが入れる程度の空間ができるはずだが、人の手によるチェック作業の途中なのか、どの棚の間にも人が入れる隙間を作る配置になっていた。棚の間の通路を歩きながら、宇門は段ボールを見て回った。「ＮＰＯ新宿」と書かれたものがあれば、それが目当ての箱である。
　入り口から三番目の棚の上の方に、目当ての大型の段ボール箱が五つほど並んでいた。宇門は、近くにあった踏み台を持ってきて、棚に登った。段ボール箱は既に開封されていた。五つとも中は空だった。
「どうなってるんだ？」
　呟いた時、棚の向う側から話し声がした。誰か居るなら状況を知っているかもしれない、尋ねてみるか、と、宇門は声のした方を棚の隙間から見た。昨日、ホテルに銃を持って乱入してきた男が、誰かと話をしていた。
「な……！」
　宇門は慌てて棚の蔭に隠れた。なぜ昨日の男が居

るのかはわからないが、相手は明らかに宇門を拘束したがっていた。ここで顔を合わすと面倒なことになる。音を立てないように踏み台を降り、棚の蔭から声のする方を伺い、誰の姿も見えないことを確認してから、音を立てないように急ぎ足で事務所に戻った。

「見つかりましたか？」

さっき応対に出た男が、茶をすすりながら訊いた。

「箱は見つかったのですが、既に空でした。誰かが既に運び出す作業をしてしまったようです」

「変ですねぇ。運び込まれたのはついさっきですよ。持ってきた人が別の箱にまとめちゃったってことはないんですか？」

「いや、そんな話はきいてません。ところで、倉庫の方に、他に誰か居るようなんですが……」

「ああ、それなら東京オフィスの人でしょう。よくこっちに来て、荷物のチェックをやってますよ。でも、今日はリストと照合するだけの作業のはずなのに。ちょっと行って訊いてみましょうか？」

「あ、いや、結構です。どうやって探すか、ちょっと相談してきます。またお伺いするかもしれませんが」

「今日は夕方まで居ますから、いつでもどうぞ」

宇門は事務所を出て、特殊バスまで走った。ドアをスライドさせ、座席に乗り込んだ。

---

「どうしたんです？　所長。そんなに慌てて……」

宇門は、胃を押さえて深呼吸した。走ると、昨日の酒で痛めた胃に響く。

「倉庫の中に、昨日襲ってきた奴が居た。どうやらあそこの社員らしい」

「どういうことです？」

「わからん。だが、あの会社、まともな商売だけをやっているようには見えないな」

「じゃあ、今度は僕が行きましょうか。僕なら顔を知られていないはずだし」

「林君が行っても安全とは限らん」

宇門は即座に否定した。

「なぜです？」

「宇宙科学研究所の人間が行くことは連絡済みだ。いつ、そのことが、昨日の奴に伝わるかわからん。林君が研究所の人間だとわかったら、捕まえて私を呼び出そうとするかもしれんぞ」

「じゃあ、このまま諦めるんですか」

「それはできん。奴らの目的は設計図だ。しかも、奴らが知らないうちに、偶然奴らの手に渡ってしまっている。気付かれないうちに取り返すしかない」

## ●PHASE 15　宇宙科学研究所、観測室

「き、軌道上に未確認飛行物体が出現」
「何だって？　山田君、それは本当か」
佐伯が中央の席のコンソールに飛びついて、宇宙望遠鏡の調整を始めた。数秒で、輝く飛行物体がメインスクリーンに現れた。
「電波望遠鏡が信号をキャッチ。大気圏突入を確認」
「山田君、レーダーレンジに入った」
大井は、緑のスクリーン上で輝点を見つめた。明るい大きな点が一つ、少し間を置いて、小さな点が数十個まとめて現れた。最後尾にも大きな点が輝いていた。
「多分、最初と最後のがベガ獣、残りはミディフォー部隊に違いない」
「どこに向かっているんだ？　大井君、わかるか」
「今計算してる……佐伯君、このままなら、東京の下町あたりに落下するぞ」
「わかった。大介さんたちに連絡しよう。大井君は、宇門所長に呼び出しをかけてくれ」
佐伯がインターフォンのスイッチを入れた。待機室に居た大介が出た。
『何かあったんですか？』
「大介さん、ベガ獣とミディフォーが大気圏突入した」
『じゃあ、すぐに出撃します』

---

「ちょっと待ってください。まだ、所長の許可が……」
――ベガ星の襲撃かね？
スピーカー越しに宇門が問いかけてきた。ズリルがシュバイラーの誘拐を通信告げてから、観測室と特殊バスとの間の双方向通信（ツーウェイトーク）が維持われていた。モニター画面の一つには、特殊バスの端末の前に座ろうとしている宇門の姿があった。
「今、戻ってこられたようです。大介さん、聞こえましたか」
――迎撃してくれ。但し、シュバイラー博士が人質になっている。状況が分かり次第、救出作戦をやってもらう。
『わかりました、父さん』

## ●PHASE　16　上空

ルート7から出撃したグレンダイザーに、三機のスペイザーが合流した。四機編隊（ダイヤモンド）を組んで東京に向かう。
「シュバイラー博士を誘拐したりして、ベガ星の奴ら、一体なにを考えてるんだ？」
言いながら、甲児は、操縦桿に組み込まれたスロットルレバーを引いた。ダブルスペイザーが速度を上

げた。
「いつぞやの立花博士の時みたいに、僕達が攻撃できないようにするつもりなんじゃないかな」
　デュークは答えた。
「じゃあ、ミディフォーはどんどん撃墜しちゃっていい、ってことよね」
　ドリルスペイザーが翼を軽く上下に振った。
「おいおい、マリア……」
「だって、最初に私達に墜とされるようじゃ、人質の意味が無いじゃない。ねえ、甲児、どっちがたくさん撃墜できるか、競争よ」
「望むところだぜ！」
「張り切りすぎて無茶しないでくれよ、甲児君。マリアも調子に乗りすぎてはいかん」
　デュークは軽くたしなめてみたが、二人の積極的な対応が戦果を挙げてきたことは否定できなかった。
「でも変ねぇ。どうしてベガ星連合軍は、シュバイラー博士の設計図を狙わなかったのかしら」
　ひかるが呟いた。
「そういや変だよなぁ。佐伯さんの話じゃ、設計図を持ち去ったのは地球人でベガ星とは関係無いっていうし」
『ベガ星連合軍は、おそらく、シュバイラー博士が設計図を持ってきたことを知らないのだ』
　宇門が通信に割り込んできた。四人の会話は、研究所と特殊バスの両方に中継されている。
「どうしてですか、所長？　設計図ごとシュバイラー博士を押さえた方が手間が省けるのに」
『ズリル長官はシュバイラー博士のことを、遊びに来た、と言っていたからね。甲児君の言うように、設計図と博士の両方がベガ星連合軍の手にあるのなら、ベガ星への対応だけ考えていればよかったのだが……』
「設計図は見つかったのですか？　所長。昨日は、設計図を探していて戻れなかったって聞いてますけど」
　昨日の朝、戻ってきた甲児とマリアと交代で、大介とひかるが偵察に出た。夕方戻ってきた二人は、宇門が設計図を捜しに行ったことを佐伯から伝えられた。夕方、東京まで迎えに行った林の目の前でシュバイラー博士が連れ去られたという報告を観測室で聞いた後は、仮眠をとるため休んだので、その後の状況はほとんど知らなかった。
『まだ取り戻してはいないが、大体見当はついた。設計図は私達に任せて、君たちは迎撃に専念してほしい。研究所とのデータリンクも維持できているから、特殊バスからでも指示は出せる』
「近距離レーダーに反応！　いくぞ！」

浅草上空に飛来したＵＦＯの編隊が、デュークの操縦席のレーダーに現れた。
「了解！」
四機は散開した。ミディフォー相手なら、まとまって攻撃するよりも、各個撃破を目指した方が効率が良い。
「僕はベガ獣を叩く。甲児君、ひかるさん、マリア、ミディフォーを頼む！」
先頭の紡錘型の円盤とすれ違うなり、グレンダイザーは反転した。円盤は、浅草駅前のプラザホテル上空に一旦静止すると、その殻を脱ぎ捨てた。現れたのは人型のベガ獣、しかも、スーツを着ている人形にしか見えないロボットが、路上駐車の自動車を踏みつぶしながら着地した。ロボットは、浅草の街を睥睨しながら、目から光線を発射した。一斉射で、仲見世通りの半分以上が吹き飛んだ。

## ●PHASE　17　品川埠頭

「何だこれは？」
特殊バス後部ののコンソールの前で、宇門は叫んだ。
グレンダイザーに匹敵するサイズのロボットが、白い三つ揃いのスーツを着込み、蝶結びの黒いネクタイを締めていた。おまけに、ステッキらしい黒い棒まで持っていた。普段の異形のベガ獣と比べると、あまりにも形状が普通過ぎる。
「でもこれ、何だか、どこかでしょっちゅう見ているような気がするんですけど……」
運転席の林の前にも、小型のディスプレイがあり、後部のコンソールと同じ映像が出ていた。
「そう言われればそうだな」
宇門は考え込んだ。
『所長、こりゃどう見てもフライドチキン屋の看板ですよ。ベガ星の奴ら、何考えてるんでしょうか』
双方向通信で佐伯が応答してきた。
『でも、カーネルサンダースにしちゃ、派手なバケツを持ってませんけど』
山田のチェックは細かい。
「そういえば、ズリルは、気の利いた方法でシュバイラー博士を返してやると言ってたな。ひょっとしてこれか？」
外見がシュバイラーそっくりのロボットに入れて送り返したのだとしたら、確かにこれ以上分かりやすい方法は無い。これを気が利いていると呼ぶかどうかは人によるとしても、あまりに単純で分かりやすす

ぎて、逆に宇門は疑った。
「デューク、そのロボットの中にシュバイラー博士が監禁されているかもしれん。だが、外見だけ真似た陽動かもしれん……はっきりするまでうかつに動くな」
言ってはみたものの、これでは何の情報にもなっていない。昨日の深酒で思考まで鈍ったままか、と宇門は自己嫌悪に陥った。研究所からの応答もない。いっそ誰か突っ込んでくれ、と思った途端、無線に割り込みが入った。ディスプレイの画像が乱れ、ノイズに混じってズリルが現れた。
『新しいベガ獣の威力がわかったか？　宇門、あの姿を見て誰かを思い出さないか……』
「先週食べに行ったフライドチキン屋の店先に立ってたな。もっと小さいのが」
敢えて宇門はすっとぼけた。相手にもっと喋らせて、情報を得なければならない。
『一体何を言ってるのだ？　スイスで何があったか思い出せ』
ズリルは苛立っていた。
「シュバイラー博士のことか。博士をどうした？」
『確かに博士そっくりだ。ベガ星人め、一体どういうつもりなんだ……？』
デュークのつぶやきが中継されてきた。

---

『ベガ獣に改造されちゃったのかしら』
ひかるが、恐ろしいことをさらっと言ってのけた。
『放熱パターン確認。半分生体って感じじゃありませんよ。完全にロボットのようです』
観測を続けていた山田からの連絡が入った。
『シュバイラーはベガ獣の中だ』
「何だと、証拠を出せ！」
間髪入れずに宇門は叫んだ。
無線への介入が止み、再びベガ獣の映像に戻った。巨大なカーネルサンダースの頭部がスライドして開く。透明なカプセルに閉じ込められたシュバイラーの姿があった。
「先生っ！」
『これで納得したか？　下手に攻撃したら博士は死ぬぞ。グレンダイザーとて手が出せまい』
通信への介入が終わった。
『父さん、どうしましょう……』
「ダブルハーケンで首から上だけ切り離して回収できるか？」
『所長、緊急の電話です。そちらに回します』
山田からの連絡で、指示が中断された。
「誰だ、この忙しい時に……」
『それが、霞ヶ関からでして』

宇門は、転送されてきた電話を受けた。相手は通産相の秘書だと名乗った。
『浅草に出現したベガ獣だが、今回はまず我々のロボットに迎撃させてもらいたい』
「どういうことです？」
『我が省が開発したロボットをテストしたいのだ。データを得るために』
「データ取りならシミュレーションでやった方が……」
相手は異星人テクノロジーの産物です」
『実戦でないとわからないこともある。これは政府の決定だ。君にも従ってもらう。既に国防軍とも共同で作戦にあたることで話がついている』
「そこまでおっしゃるなら仕方ありませんが……」
ベガ星との戦いに、国防軍以外が出てきたことはこれまでに無かった。なぜ今頃になって通産省が？　と宇門は訝った。
『そうそう、今回の我々のロボットの外装をデザインする権利は、競争入札で売却しました。民間企業の宣伝を兼ねる結果になっているが、まあ気にしないでもらいたい』
「……」
さては開発の最終段階で予算オーバーしたな、と察しはついたが、宇門は黙っていた。

『まあ、早く実戦投入して存在を示せというのはスポンサーの意向でもある』
「実は、ロボットの頭部にＥＴＨのシュバイラー博士が閉じ込められています。攻撃は、人質の安全を優先して行っていただきたい。まかり間違えば国際問題になりますよ」
地球の武器でベガ獣とまともに戦えるのは、マジンガーＺかグレートマジンガーくらいのものだから、通産省仕様のロボットに目一杯攻撃させたところで多分大した効果は無いだろうと思いつつ、宇門は念のために言ってみた。
『……わかった、そのようにしよう』
電話が切れた。
「大介、聞こえるか。そのベガ獣は日本政府が先に迎撃したいそうだ。一旦退いてくれ」
『でも……』
「人質のことは伝えた。少し様子を見るんだ」

## ●PHASE　18　浅草

ダブルスペイザーの両翼から、ミディフォーの編隊に向かってサイクロンビームが放たれた。二機まとめてミディフォーを破壊した。ばらばらの方向に逃

げだした三機のうちの一機を追って上昇した。逃げた二機が反転してダブルスペイザーの後ろに回った。
　ダブルスペイザーの操縦席で警報が鳴った。
「くそっ、後ろか……」
　甲児は呟いた。エンジン内部への直撃でも喰らわない限り、ミディフォーのビームが一回や二回命中しても、ダブルスペイザーの装甲を破壊されることはないが、気分は悪い。
「スパークボンバー！」
　上から飛来した五万度の熱線が、二機を吹き飛ばした。ドリルスペイザーが急降下していく。
「マリアちゃんか、助かったぜ」
「どういたしまして」
　ドリルスペイザーが、別のミディフォーの後ろについた。ジグザグに飛んで逃げようとする円盤を下から追い上げる。
「ひかるさん、そっちへ行ったわ！」
「マリンミサイル！」
　目の前に飛び出して来たミディフォーに向かって、ひかるはミサイルを発射した。外しようのない距離で命中し、ミディフォーが爆発した。
「あらかた片付いたな。デュークは？」
　甲児は、ダブルスペイザーを旋回させながら下を見た。
　ベガ獣から少し離れた上空で、グレンダイザーが静止していた。
「どうしたんだ？　攻撃しないのか？」
「先に政府が攻撃をかけるらしい」
「冗談だろ」
　ダブルスペイザーが、機首を巨大なケンタッキー人形に向けた。
「止めるんだ甲児君、所長の命令だぞ！」
「ちぇっ、しょうがないな」
　四ブロックほど離れた浅草小学校の校庭に、国防軍の装甲車やトラックが詰めかけ、濃緑色のテントを立てていた。戦闘服姿の兵士に混じって、白衣や作業着を着た集団が走り回っている。
「甲児、こっちに応援に来て！」
　マリアからの通信が入った。
「どうしたんだ？」
「ベガ獣は二体よ。残り一体は、まだ飛び回っているわ」
　ひかるが、上空を飛ぶ円盤の映像を転送してきた。大気圏突入した円盤型のままで、スパークボンバーもマリンミサイルも撥ね返して飛んでいる。
「よし、今いくぜ！　三機で一斉攻撃だ」

甲児はスロットルレバーと操縦桿を同時に引いた。急上昇し始めたダブルスペイザーの上空に、倍以上のサイズの巨大な輸送機が進入してきていた。

「危ねぇ！」

ほとんど垂直に上昇しながら、甲児は方向転換した。両翼の光量子エンジンまで動員して輸送機を避けた。

「音速越えてなくて助かったぜ……」

翼の全幅六七・九メートル、全長七五・五メートル、最大ペイロード一一八トンのC－5（ギャラクシー）でも、至近で超音速衝撃波を浴びれば無事では済まない。

そのギャラクシーの後部がスライドして開いた。中から全長三十メートルほどの人型ロボットが放り出された。巨大なパラシュートを開いてゆっくりと降下した。着地の瞬間、膝を曲げてショックを吸収し、パラシュートを切り離した。浅草小学校に詰めかけた一団から歓声が上がった。

## ●PHASE 19 品川埠頭

「あれが通産省のロボットか……」

特殊バスのメインスクリーンが、ロボットの全身像を映し出していた。

---

丸顔に黒縁丸メガネの中年男性が微笑んでいた。頭には尖った帽子をかぶり、全身をゆったりとした服が覆っている。帽子の襟首と胸元を覆う縁は鮮やかな青色、残りは紅白ストライプのツートンカラー。黒い靴を履いて、背中には円筒形をぶった切ったパーツを背負っている。両手には武器代わりらしい棒を持っていた。

『所長、これは……』

佐伯が笑いを堪えて通信してきた。

「どこがスポンサーになったか、言われんでもわかるな」

外見だけでも全国的に有名、さらに背中に背負った円筒の断面に「大阪名物　くいだおれ　道頓堀」と大書してあるのでは、間違えようがない。今回は、さらに、蛍光オレンジで通商産業省（MITI）のロゴがプリントされている。

『所長、食べに行かれたことあるんですか』

「いや、まだ行ったことはないが……」

『くいだおれ太郎にしては、前の太鼓が足りませんけど……』

山田のチェックは相変わらず細かい。

「それよりも問題は性能（スペック）だ。専門家の意見をきいてみるか」

宇門は、観測室との通信を維持したまま、光子力研究所の所長室直通番号を呼び出した。電話に出た弓教授に、浅草に現れたロボットについて何か知っているかと訊いた。弓の返事があるまでに、しばらく間があいた。

『……また、随分派手なロボットですねぇ』

「まさかとは思いますが、あれの製作に関わってはおられないのですね？」

『ここ最近、新たなロボットの開発はしていません。光子力研究所も、科学要塞研究所も』

「なぜ今頃通産省があんなものを出してきたのかということと、あのロボットの性能を知りたいのです。専門家の目から見て、どんなところでしょうか」

光子力研究所は、文部省直轄の国立研究所である。所長の弓なら、他の官庁の情報も知っているに違いない。

『縦割り行政をやっている省庁間の勢力争いでしょう』

弓の回答は簡潔だった。

『マジンガーZは民間人の十蔵博士が開発しました。運用は文部省直轄の光子力研究所がやったので、かろうじて政府が関与できました。しかし、グレートマジンガーは、開発も運用も民間研究所です。その上、ベガ星との戦いの最前線に立ったのが、おたくのような民営の天文台と正体不明のロボットというのでは……三回続けて民間人に出し抜かれたに等しい。そろそろ存在を示さないとまずい、と役人が判断したとしても、不思議はありませんねぇ』

「しかし、なぜ通産省が……」

『マジンガーZの運用で文部省に先を越された上、光子力と超合金Zまで押さえられてしまっては、通産省としても黙ってみているわけにはいかないでしょう。あそこは配下に機械研究所を抱えていますからね。天文台だって文部省の管轄ですし』

「私は異端と呼ばれ続け、主流からは外れています。文部省は私のところなど相手にするわけがないし、通産省に妬まれる覚えも無い」

『……異端のまま孤高を持するには、不釣り合いな天賦の才をお持ちだ。その分、業を背負う覚悟もしていただかないと』

弓が説教じみた口調になった。

「どういう意味です？　ロボットを作る力は私には無いはずですが」

『スペイザーですよ。対空ミサイル程度では墜ちない装甲を持ち、機動性はそこらの戦闘機を上回っている。簡単に機体の一部を壊せて、それだけで墜ちる

ものしか作れないのが、今の航空工学のレベルなのに……。あちこちで妬まれてる可能性はあるということですよ。まあ、今回はあまり関係なさそうですが』

「迷惑な話だ……他には何か？」

『そうそう、文部省と通産省の現事務次官は同期で、しかも犬猿の仲だそうですよ』

こういうややこしいお役所の相手をしてうまくやっていく才能は自分には無い、と宇門は思った。

「ロボットの製作が通産省単独だとすると、超合金NZも光子力も使っていないと考えて良いのですか」

『そうです。おそらく、材料は通産省が独自開発した新素材の軽量合金、背中に背負っているのは、バッテリーと小型のタービンジェネレータでしょう』

「ベガ星を相手にしては、勝つのは難しい……？」

『時間稼ぎ程度にはなるでしょう』

宇門は礼を言って電話を切った。

「みんな、聞いての通りだ。政府のロボットではベガ獣は倒せん」

『そんなことだと思ってましたよ。スポンサーが居るったって、何でこんな無駄なことをするんだ』

佐伯は呆れていた。

『でも、滅多に優勝しない阪神タイガースを熱烈に応援し続ける土地柄ですよ？』

山田が指摘した。

「それもそうだな」

イメージアップになるかダウンになるかは別として、浅草の街に立つ二体の看板モドキは、宣伝効果だけは抜群であった。もっとも、カーネルサンダースの方は、企業の思惑とは無関係に出現したものである。

『これで、円盤獣ザミザミでも出てきたりしたら、東京の下町で道頓堀の宣伝合戦をすることになるなぁ』

「かに道楽とかに将軍が足並み揃えて訴えてくるぞ！」

運転席からの林の言葉を、宇門は一蹴した。

「別のベガ獣はどうなった？」

『攻撃していますが、効果がありません！』

甲児が応答した。

「デューク、甲児君達と一緒に、先にもう一体のベガ獣を倒せ」

『わかりました』

モニター画面の中で、三機のスペイザーに追われて、円盤が降下してきた。ダブルスペイザーにドッキングしたままで、ダイザーの放ったスクリュークラッシャーパンチが命中した。浅草公会堂の建物を半壊させて円盤が墜落した。円盤が二つに割れて、上半分

が巨大なハサミに変形した。足が生えたカニ型のベガ獣が、瓦礫を踏みしめて立ち上がった。
間を置いて、ヘッドセット越しに所員達の爆笑が聞こえた。「ホントにカニかよ」という叫び声も混じっていた。
「形は気にせず迎撃しろ！　くいだおれ人形が時間を稼いでいる間に、カニの方を倒すんだ」
二日酔いで痛む頭を押さえながら宇門は指示を出した。

## ●PHASE　20　浅草

「対ゴジラ戦の前線指揮所のまんまだな……」
通産省・機械研究所所属の主任研究官は、浅草小学校の校庭に立ち並ぶテントを見ながら、しばらく前に放映された特撮映画のシーンを思い出していた。既に、テントの中には折りたたみの机が運び込まれ、無線機やモニターが並んでいた。自家発電装置をテントの外に出していたが、それでもテントの中まで騒々しい。
戦いの様子を撮影するためのカメラ部隊として、国防軍の陸戦部隊がかり出されていた。モニターの画像のいくつかは激しく揺れ、カメラを持った部隊が撮影に最適な位置を求めて移動していることを示していた。やがて、映像が安定した。
「よし、始めるぞ。準備はいいか」
主任研究官は、テントの中に設置された操縦席に入った。ロボットは、離れた操縦席からの信号で遠隔操作（リモートコントロール）することになっていた。格闘戦が予定されているロボットに人を搭乗させることは危険だという理由で、操縦席を搭載することは見送られたのだった。
「準備完了です」
研究員達の返事を合図に、主任研究官は、左右のレバーを握って、フットスイッチを踏み込んだ。
身長三十メートルのくいだおれ太郎が、同程度の身長のカーネルサンダースに向かって走った。仲見世通りを雷門に向かって歩いていたカーネル人形が立ち止まった。くいだおれ太郎は、服の下から迫撃砲を取り出し、カーネル人形に向けてぶっ放した。身長三十メートルに合わせたサイズの迫撃砲は、地対地ミサイル程度の威力はある。狙った通りにカーネルサンダースの腹に着弾した。ベガ星の技術で作られた装甲に傷を付けることはできなかったものの、爆風でカーネル人形は尻餅をついた。二百トン超の質量に直撃されて、雷門の柱が折れた。屋根が半ばで曲が

り、風神・雷神像を潰しながら落ちた。
　すかさず、くいだおれ太郎が飛びかかった。倒れたままのカーネル人形は、両手と足でくいだおれ太郎を掴んで巴投げした。背中の太鼓型のパーツを背負っている結果として、背中で落下しても急には止まれず、一回転して滑りながら宝蔵門に足から突っ込んだ。門の瓦がバラバラと落下する。
　カーネル人形が立ち上がった。雷門の瓦礫をステッキと足で払いのけながら、くいだおれ太郎に向かって歩いていく。くいだおれ太郎も立ち上がり、立て膝の姿勢でバズーカ砲を取り出した。ロックオンするなり、カーネル人形に向かって発射スイッチを押した。カーネル人形はまたもや後ろにひっくり返った。後ろに抜けた発射の爆風が、二階建ての宝蔵門の屋根の瓦を吹き上げ、屋根をめくり上げた。飛び散った瓦が降り注ぐ直撃をうけて、参道両側の建物の屋根に無数の穴が開いた。
　バズーカ砲の筒を投げ捨て、くいだおれ太郎は後退した。浅草寺本堂を背にして、カーネル人形と対峙した。カーネル人形は、仕込み杖になっていたステッキを引き抜いた。目からビームを放ち、屋根を失った宝蔵門を、両側の壁を残して消滅させてから、本堂に向かって走った。勢いを弱めずに、くいだおれ太郎に向かってステッキを突き出した。串刺しをさけるためにくいだおれ太郎は横にステップして躱した。剣となったステッキは、そのまま浅草寺本堂の屋根を貫いた。フェンシングの要領で突き出されるステッキを、寸前で躱し続けたのは、操縦者に武術の心得があったからである。結果として、勢い余った剣先が、本堂の瓦を徐々にはぎ取っていった。

「シュートイン、ダイザーゴー！」
　浅草公会堂めがけて、グレンダイザーが飛び出した。幅の広い道に立て膝で着地したグレンダイザーが、反重力ストームを放った。カニ型のベガ獣は上空に突き上げられ、錐揉みしながら伝法院前の庭園に落下した。一般公開も行われていない貴重な庭園の庭石を砕き、池の水を盛大にまき散らした。
　グレンダイザーが勢いよくジャンプし、池に落ちたベガ獣に飛び蹴りを喰らわせた。起き上がりかけたベガ獣は、再び池の底に叩きつけられて水しぶきを上げた。
　上空を飛ぶダブルスペイザーとマリンスペイザーがミサイルを発射した。束になって飛んできたミサイルを、ベガ獣は巨大なハサミを上げてガードした。着弾に間があいた隙に、再び円盤に変形し、飛び去ろ

うとする。
「ショルダーブーメラン！」
グレンダイザーの肩から二枚の刃が飛んだ。衝撃を受けて、ベガ獣は転がりながら墜落した。花やしきの門を壊し、メリーゴーランドを踏みつぶしながら、再びカニの姿に戻った。ダイザーが駆け寄った。ベガ獣は、ハサミでスペースショットのタワーの根元を切り、ダイザー向かって投げつけた。
「ダブルハーケン！」
ダイザーは、両肩から飛び出したハーケンを合体させつつ右に振った。弾かれたタワーは回転しながら飛んで行き、五重塔に突き刺さった。
「ハンドビーム！」
赤く輝くビームが、円盤獣の足に命中した。右足二本が爆発した。遊戯施設を倒壊させながら、ベガ獣はショップが密集するビルにハサミを突き立てた。体を固定した上で、胴体の真ん中から冷凍光線が勢いよく発射された。
「うわっ！」
ダイザーのキャノピーが凍り付いた。ダイザーの動きが鈍ったのを見て、ベガ獣は、右に回り込もうとした。
「ドリルミサイル！」

---

上空からマリアが掩護射撃してきた。連発されるドリルミサイルが着弾する軌跡と、ベガ獣の移動方向が重なった。腹を三個所貫かれたベガ獣が、闇雲にハサミを振り回して暴れ始めた。ハサミの直撃をうけてＢｅｅタワーがもぎ取られた。
グレンダイザーは、腕で氷を払い落とした。
「スペースサンダー！」
ドリルミサイルが穿った穴目がけて、白く輝く光線が、ダイザーの頭部から飛んだ。見る間に亀裂が拡がり、ベガ獣は爆発した。部品が飛び散り、爆風で周囲を取り囲んでいた店舗の窓ガラスやドアを破壊した。ジェットコースターが倒壊し、爆発の熱で発火点に達した建物から次々と火の手が上がった。
「シュバイラー博士の方はどうなった？」
ダイザーが、浅草寺の方を振り向いた。

巨大な機関銃を吊り下げ輸送してきたＣＨ－５３（シコルスキー）が、本堂上空でロープを切り離した。くいだおれ太郎が、身長に近い長さの機関銃を受け取り、腰だめに構えた。弾帯は既に取り付けられていた。
カーネル人形がステッキ型の剣を振り下ろしてくるのを、タービンエンジンの排気の勢いまで動員して後ろに飛んで躱し、本堂の屋根を飛び越えながらくい

だおれ太郎は引き金を引いた。戦車に搭載されているのと同じサイズの一二〇ミリバルカンを連射する。連射の反動で着地に失敗し、浅草寺病院前で派手に転んだ。あさっての方向に飛んだ弾が、本堂、薬師堂、影向堂に次々と命中した。鉄筋コンクリートで再建した本堂が、着弾と同時に砕けていく。木造建築はひとたまりもなく破片となって飛び散った。

カーネル人形は、本堂の屋根に足をかけて乗り越えた。くいだおれ太郎の腕をとって投げ飛ばし、本堂に叩きつけた。構造材と配線が壊れて、くいだおれ太郎の動きが止まる。カーネル人形は、掌からビームを放った。エンジン用の部品や燃料、電池の溶液をまき散らしながら、くいだおれ太郎は爆発した。飛び散った燃料に引火し、倒壊した建物が燃え上がった。

## ●PHASE 21 品川埠頭

宇門は、特殊バスの後部でモニターに見入っていた。ダイザーチームの指揮をとるつもりだったが、恩師シュバイラーのことも気に掛かる。ついつい、カーネルサンダース対くいだおれ太郎の無制限一本勝負の方に釘付けになっていた。

物騒な武器を取り出し格闘を行いながら、愛想よく目尻を下げて微笑んだ唇は変わらない。比例拡大されているだけで、くいだおれ太郎は、やはりくいだおれ太郎であった。ロボットとしての性能はさほどではないとわかっていても、見ているだけで別の意味で妙に迫力があった。乱暴な態度で恫喝されるなら予想の範囲だが、毎度おおきにと言わんばかりの笑顔のままで機関銃を手にして殴り込んでこられたら、これは怖い。対するカーネルサンダースの方も、店先で客を迎える営業スマイルのままで破壊の限りを尽くしている。

「所長、ちょっとあれを見てください」

林に呼ばれて、宇門は我に返った。

「どうしたのかね？」

「あの外国人ですが……」

中央の座席の背もたれを倒して隙間を作ると、宇門は林が手に持っている小型のモノキュラーを受け取り、倉庫の方を見た。事務所の扉を開けて出てきたらしいスーツ姿の恰幅のよい白人が、昨日宇門達を襲った日本人と立ち話をしていた。その外国人の履いているズボンは、シュバイラーのものとそっくりだった。

「まさか……」

「これ、ですよね……」

林が、シュバイラーの上衣を取り出した。宇門は、モノキュラーの倍率を上げて見比べた。
「どうやら、シュバイラー博士のズボンを履いているらしい」
「どうやって取り戻すんです？」
「普通に交渉して買い取るか……最悪の場合は脅してでも出させる」
「追いはぎしてズボンを奪うなんて、新聞ダネもいいところだと思いますが……」
立ち話をしていた二人は、事務所のドアを開けて中に入っていった。
宇門は、特殊バスの後ろの出入り口から外に出た。耳にかけていたヘッドセットのスイッチを切って胸ポケットに入れた。
「指揮、どうするんです？」
「シュバイラー博士の閉じ込めているカプセルを切り離せ。本格的な攻撃はその後だと伝えておいてくれ」
宇門は、再び倉庫に向かった。

事務所入り口で、宇門は耳を澄ませた。話し声は聞こえなかった。そっとドアを開けて、隙間から様子を窺ってから中に入った。相変わらず仕事中の、作業服姿の倉庫番に挨拶をした。事務所を見回すと、部屋の隅に置かれた大型の業務用のダストボックスの上に、さっきの外国人の上衣と揃いらしいズボンが捨ててあった。
「これを着ていた人は？」
「本社の現地法人の人らしいですよ」
「探しているズボンだが、どうもその人が履いているらしいのだが……」
「さっき、倉庫で油の缶を倒して汚したと言ってましたから、倉庫で見つけたのを使ったんでしょうね」
「わかった。とにかく会って話してみよう」
宇門は、ドアを開けて倉庫に足を踏み入れた。あの外国人はどこにいるのか、と通路を早足で歩いて探した。ひどい二日酔いのまま動き回ったせいで、どうにも体調が悪かった。普段ならもう少し慎重に相手の出方を見てから姿を見せるところだが、早いところ話を付けてしまうことにした。
倉庫の奥に、蓋の開いた大きな木箱があった。古着を詰め込んでいる途中らしく、衣類の入った段ボール箱が周囲に並べられていた。その脇に、恰幅のよい悪人面の白人と、昨日ラブホテルに押し入った日本人が立っていた。別の日本人一人は片腕を吊っていた。
宇門は歩いて近寄った。その姿に気付いた日本人が驚いて宇門を見つめ、後ろに回った。

「そのズボンを返してもらえないか？」
宇門は白人に向かって話しかけた。
「何だって？」
「拾ったのだろう？」
「そこの箱からな」
「実はそれは落とし物で、間違ってここに運び込まれたのだ。知り合いの親父さんの形見の品でね。新品が買える値段で買い取らせてもらいたい」
怪訝な顔で白人が黙っているのを見て、宇門は続けた。
「何なら金額を上乗せしてもかまわない。希望する額を言ってくれないか」
「それよりも、我々はあんたに用がある。一緒に来てもらいたい」
宇門は振り向いた。昨日の日本人が、スーツの下のショルダーホルスターから拳銃を抜いて突きつけていた。
「誘拐される覚えはないのだが……」
宇門は、相手の足の甲を思い切り踏みつけ、悲鳴を上げる相手の鳩尾に肘打ちを入れた。見事にＫＯされた相手がその場で倒れた。
「倉庫で作業するなら、安全靴に履き替えておくべきだったな」

---

言いながら、右腕を吊ったままで加勢しようとつかみかかってきたもう一人を足払いで倒した。
さて交渉の続きを、と、白人の方に向き直った途端、吐き気がこみ上げて宇門はふらついた。他所の倉庫を汚すのもまずい、と片手で口を覆って深呼吸して耐えた。軽いステップで踏み込んできた白人が、拳で宇門の後頭部に一撃を入れた。防御も回避もできずにまともに喰らって、宇門は意識を失った。

## ●ＰＨＡＳＥ　22　浅草

浅草小学校の校庭では、測定チームが我先に逃げ出そうとしていた。作業服や白衣を着た研究員が、ケーブルを引きずったままで、モニターやら測定装置やらを抱えて、次々に国防軍のトラックの荷台に飛び乗った。車が校庭から走り出すのと入れ違いに、ミサイルを乗せたトラックが走り込んでくる。
「ダイザージャンプ！」
ダイザーが、既に炎に包まれている浅草寺に着地した。
「ひかるさん、マリア、まず火を消すんだ！」
デュークが叫んだ。マリンスペイザーとドリルスペイザーが低空で旋回した。カーネル人形の振り回

す剣をうまく避けながら、白い消化剤を撒いていく。ほとんど火が消えたのを見て、ダイザーはダブルハーケンを構えた。
「デューク、どうするんだ？　さっきから所長とも連絡がとれないし……」
甲児が呼びかけた。
「首を切り落とす。それしかシュバイラー博士を助ける方法は無い」
「ドッキングしようか？」
「いや、どうやら飛行能力は持ってないらしい。地上戦だけで片が付きそうだ。さあ来いっ！」
営業用のスマイルを浮かべた造作に向かって言っても、今ひとつ迫力に欠ける。気合いと共に突きだしたダブルハーケンは、剣に弾かれた。
「くっ……見かけよりも動きが速い」
「見てくれは看板だけど、サモ・ハン・キンポーみたいに敏捷なデブだぜ」
「爆発させるわけにいかない分、攻撃の手が限られる」
カーネル人形の目から発射されたビームが、ダイザーの操縦席に命中した。顔をそむけて避けたダイザーに、カーネル人形が飛びかかった。ダイザーを仰向けに倒して馬乗りになった。
「くそっ……」

---

ダイザーは、両手でカーネル人形の頭を握った。普段なら、そのままパワーを上げて握りつぶすところだが、シュバイラー博士が居るのでは手加減せざるを得ない。
「俺がやってやる！　ダブルカッター！」
低空進入するダブルスペイザーの両翼から2枚の刃が飛んだ。途中で合体し、カーネル人形の首を半分以上切断する。慌てて体をひねったダイザーの顔をかすめて地面に突き刺さった。
デュークは、操縦桿に力を込めた。ダイザーが、カーネル人形の首を引きちぎった。
「反重力ストーム！」
ダイザーの胸から発射された光線に突き上げられるようにして、首を失ったロボットが空中に舞い上がった。
「マリンカッター！」
上空を飛んでいたマリンズペイザーが、ロボットの胴体を狙い撃ちにした。あっさり貫通して穴が開いた。
「とどめよ！　スパークボンバー」
ダブルスペイザーから飛ぶ光の玉が、胴体の穴に吸い込まれ、ロボットは爆発した。

## ●PHASE 23 品川埠頭

ガタガタと揺さぶられて宇門は目を開けた。周囲は暗い。

「一体ここはどこだ？」

両手をついて起き上がろうとして、額を思い切りぶつけた。殴られた後頭部にまで響いて、うめき声を上げた。痛みが治まるのを待って、手足を動かしてみた。手に触れるのは柔らかい布ばかりである。布をかきわけて体をずらした。手を伸ばすと、ささくれだった木の板の感触があった。板の隙間が明るい。外を見ようとしたら、隙間にずり落ちた。

「棺桶にしては広いな……」

手探りでわかったのは、大きな木箱に閉じ込められたということ、その中には、別の箱が入っており、梱包材として衣類が詰め込まれているということだった。宇門は胸ポケットを探った。小型のヘッドセットはそのまま入っていた。ホルスターに突っ込んでおいたサイクロン銃も取り上げられてはいなかった。よほど慌てたのか、それとも学者だから何も持っていないだろうと考えたのか――宇門はヘッドセットを耳に掛けてスイッチを入れた。

『所長、どうなさったんですか？』

「殴られて気絶している間に閉じ込められた」

『ええっ！　今どこです？』

「わからん。箱の中らしいが」

通信は、ヘリのローター音にかき消された。小刻みな揺れがおさまったとたん、浮揚感があった。宇門は全身に力を込めて、横になったままの姿勢で箱の側面を内側から足で押した。ばきっと音がして、板が割れた。何度か揺さぶると、側面の板一枚が剥がれた。倉庫が下に見えた。

宇門は、今壊した箱の板を見た。よく見ると、蝶番がとりつけてあって、全面が開くようになっている。ズボンのポケットからスイスアーミーナイフを取り出し、今開けた穴から外に右腕を出して、蝶番と反対側の鍵付きのロックを取り付けているネジを緩めた。二本を外し、三本目をあらかた緩めた時、大きな揺れが来て中に入っていた箱がぶつかってきた。単に揺れるというよりも、振り回されて遠心力がかかった感じだった。荷物の重量と宇門の体重が一度に扉にかかり、緩んでいたネジが鍵をつけたままですっぽ抜けて外れた。箱の側面の蓋が開いた。宇門は、右腕を蓋の穴に突っ込んだまま木箱の外に投げ出された。中に入っていた箱と衣類が海面に向かって落下していく。

案の定、箱はヘリに吊り下げられたまま、沖に運ばれようとしていた。右腕を蓋に引っかけた状態でぶら下がっているのでは、蓋の蝶番も長くは保ちそうにない。宇門は、蓋の縁を掴み、穴に足をかけた。気合いを入れて体を持ち上げ、箱を吊しているロープを掴んだ。そのまま箱に足をかけてよじ登った。

ヘリの後部ドアがスライドして開いた。倉庫で殴り倒した男が、拳銃を手に威嚇射撃してきた。身動きできないまま連れ去られるのか、と思った瞬間、男に向かってビームが飛んできた。ビームの直撃を受けた男がヘリの中に倒れ込んだ。ロープに掴まったまま、宇門は振り向いた。

「宇門博士、ご無事ですかーっ！」

「エ、エルザ……！」

ショックガンを片手に、黄色にオレンジのラインで塗装した研究所のヘリ（CH-46）のドアを開けて、エルザが手を振っていた。

「今日はずいぶん勇ましいな。どうなってるんだ一体……」

研究所のヘリが間近で旋回した。操縦桿を握っている大井の姿もあった。

『昼過ぎにエルザさんが着くって連絡があったので、羽田まで迎えに来ました。林さんが、所長が倉庫に入ったまま出てこないっていうので、とりあえずこっちに合流したんですが……そんな所で一体何やってんですか、所長？』

「回収作業だ」

吊り下げ用のロープをよじ登った宇門は、スキッド式のランディングギアに向かってジャンプした。かろうじて片手が届いた。振り落とされそうになりながらもう一方の手をかけ、両手でぶら下がった。ヘリの揺れに合わせて、さらに横棒に足を引っかけて、開いているドアから中に入ろうとした。

「おとなしくしていろ！」

倉庫で会った白人が、ヘリのドアを閉めようとして身を乗り出した。

「やかましい！　人を荷物扱いしやがって……」

宇門は、白人の足に飛びついた。バランスを崩した白人は、ヘリの外に転がり落ち、ランディングギアにぶら下がった。その太ももに、宇門がしがみつく恰好になった。

「ズボンを返せ！」

宇門は、振り落とそうと暴れる白人のベルトに手を掛けた。バックルをを外し、チャックを下まで降ろした。宇門の体重を支えきれずに、ズボンのボタンが外れた。ズボンがすっぽ抜けた勢いで、宇門は振り落と

された。箱を吊り下げているロープにもう一度掴まろうとしたが間に合わない。
ズボンが風に煽られながら空中を舞った。宇門は、ベルトの後ろからサイクロン銃を引き抜いた。落下しながら両手で構える。エネルギー調整のスイッチを最大に合わせた。落ちてくるズボンの向こうで、ヘリが方向を変えた。
「直撃させるわけには……」
小型のハンドガンとはいえ、最大出力のビームならヘリを簡単に貫通する。燃料タンクにでも当たれば、爆発は免れない。
射線からヘリの胴体が外れた瞬間、宇門は引き金を引いた。空気をプラズマと化しながら、ビームがズボンを貫いた。ヘリ本体はビームの直撃を免れたが、ビームはヘリの四枚のローターのうち一枚を半ばから吹き飛ばし、青空に吸い込まれた。ズボンは一瞬のうちに白い光を放って燃え上がり、灰となって飛び散った。銃を構えたまま、宇門は落下し、派手に水を跳ね上げて背中から海に突っ込んだ。背中をしたたかに打ち、息が詰まった。サイクロン銃をベルトに差し込んで、何とか水面に顔を出した。
「所長ーっ！」
大井が叫びながらヘリを旋回させた。

---

「ダメよ！　今ダウンウォッシュを浴びせたら……」
エルザは、開いているハッチから半身を乗り出して叫んだ。ヘリのローターが作る下降気流が、浮かび上がった宇門のまわりの海水を押し下げ始めていた。大井は、ヘリを上昇させた。
宇門は、埠頭に向かって泳いだ。スーツをを着たままなので、水の抵抗が大きく、思うように進まない。姿勢を崩して息継ぎに失敗し、何度も海水を飲んだ。
「所長、こっちです」
林が、腹這いになって宇門に手を差し出した。宇門は両手で林の手首を掴み、勢いをつけて何とかコンクリートの岸壁に手を掛けた。林は、宇門を引っ張り上げた。
どうにか岸に上がった宇門は、海水に噎せて咳き込み、両手をついて這った姿勢のままで、飲んだ海水を吐き出した。そのまま仰向けに横になって、深呼吸を繰り返した。
「溺れるかと思いましたよ。でも、その様子じゃ人工呼吸の必要は無さそうですね」
「海水浴は久しぶりだ」
宇門は、ポケットからパイプと銀色の缶を取り出した。中に入った水を吹き飛ばして、缶からタバコの葉を取り出し、パイプに詰めた。林が、ライターの火を

差し出した。空を見ながら、宇門は煙を口に含んだ。
「あいつらはどうしている？」
「あそこです。どうやら……ビームがかすめたみたいですね」
林が沖を指さした。宇門は腹這いになって、林が指した方向を見た。ヘリは、沖に向かっていた。何とか姿勢を立て直そうとしながらも果たせず、不安定に揺れながら徐々に高度を下げていた。上半身はスーツにネクタイ、下半身はトランクスだけという間抜けな姿の白人をぶら下げたままで。
「……命中させるつもりはなかったが、外しきれなかったか」
「あの様子なら、無事に不時着できそうだ。今度は彼等が水泳する番ですね」
林は、ヘッドセットを外して宇門に近づけた。宇門のヘッドセットは、海水に浸かって動かなくなっていた。
――父さん、そっちはどうですか？
「全部終わった。シュバイラー博士は無事か？」
――収容されていたカプセルを今甲児君が開けています。怪我はなさそうです。何だかもうすっかりリラックスしちゃって、中で一服やってますよ。
「……うむ」

---

宇門は、思わず手に持ったパイプを見つめた。
変なところで、師弟の行動が似ている。林が笑いをこらえていた。
「そうか。ダブルスペイザーでシュバイラー博士を研究所まで送るよう、甲児君に頼んでくれ」
――研究所へ、ですか？　多分、お父さんは、牧葉家でおもてなししろって言うと思うんですけど。
ひかるが交信に割り込んできた。
「それなら、お願いしようか。シュバイラー博士も喜ぶだろう」
宇門は、林にヘッドセットを返し、スーツから水をしたたらせながら立ち上がった。高速艇が二隻、海に落ちるヘリに向かっていた。
「あっちは救助付きか……」
林が、ポケットから小型のモノキュラーを出して船を見た。
「救助っちゃー救助なんでしょうけど……先行してるのが海上保安庁で、追っかけてるのが警視庁ですね」
「じゃあ、逮捕されるのも時間の問題だな」
「一体何だったんでしょうね。所長を狙ってくるなんて」
「わからんが、密輸組織か何かだろうな」
「しかし、あのズボン、見事に灰になりましたね」

「ああ、これで作戦終了（ミッションコンプリート）だ」
「そりゃそうと、大事な形見って設定じゃなかったんですかぁ」
林のつぶやきに、宇門は苦笑した。
「ヘリを呼び戻して特殊バスをつり下げ輸送させろ。全員撤収するぞ」
「了解！」

## ●PHASE 24 牧葉家

牧葉家では、シュバイラーとエルザの歓迎パーティーが行われていた。リビングにテーブルを運び込んで料理や酒を並べていた。
そのまま八ヶ岳に向かうという甲児を無理矢理説き伏せて買い込んだ大量の赤いバラは、ひかるとマリアに手渡された後、花瓶に入れられて、リビングの隅に飾られていた。
「いやーしかし何と言っても男は酒じゃ……」
団兵衛が、シュバイラーのグラスに日本酒を注いだ。シュバイラーは一気に飲み干す。団兵衛のテキサス訛りの英語と、ドイツ語訛りのシュバイラーの英語が飛び交っていた。
「おーい、ひかる！　もっと酒を持ってこい！」
「はーい」
ひかるが、一升瓶を抱えて台所からやってきた。パーティーを始めた時に開けた一升瓶は既に殆ど空であった。
「まあ……もう無くなっちゃったの？」
「いやー、日本の酒も旨い」
シュバイラーは上機嫌で、空になったグラスをひかるに付きだした。ひかるが、一升瓶の栓を引き抜いて注ぐのを、何ともうれしそうに見つめた。
「ほどほどにしてくださいよ、博士」
「今日くらいは大目に見てくれ、エルザ。ベガ獣に入れられて、危うく死ぬところだったのだし。こうして楽しめるのも生きておればこそじゃ」
エルザは諦めて溜息をついた。
「おい、宇門君。さっきから全然飲んでおらんじゃないか」
「いや、私は……」
シュバイラーに言われた通り、歓迎パーティーの最初の乾杯でも、宇門は一口飲んだだけだった。その後も、何度かグラスに口を付けたが、結局ほとんど飲まないままになっていた。
リビングでつけっぱなしになっているテレビには、大阪府知事が、今回の浅草寺壊滅の原因と大阪府は無

関係であることを繰り返し説明する様子が映っていた。
　宇門はグラスを置いてリビングのベランダに出た。ベランダに置かれたテーブルセットの椅子に腰を下ろした。二日酔いはおさまっていたが、具合が悪いのに無理をして一日中走り回ったことで、疲れ果てていた。椅子に凭れるとそのまま眠りそうになる。
「危うく死ぬところだったのは私の方なんだが……」
　誰のスケベ心のせいでこうなったんだ、とシュバイラー博士に面と向かって言いたかったが、言ったところで何の効果もないことも、宇門は既に知っていた。
　ひかるが、スープの皿をもってベランダに出てきた。
「どうぞ」
　宇門は一口飲んだ。
「美味いな……生き返るよ、これは」
「設計図が隠されたズボンを探して、いろいろ大変だったって、林さんが言ってました」
　ひかるは、宇門がせっせとスープを飲むのを見ていた。
「シュバイラー博士の宴会にはつきあえそうにもないし、どうしたものか」
　スープを飲み終えて、ベランダの窓から団兵衛相手に酒盛りをしているシュバイラーを見た。宇門の方は、まだ固形物は喉を通りそうになく、酒を飲んだら具合が悪くなるのが目に見えていた。
「今晩はウチで泊まっていただきますから、所長は早めにお休みになってください」
「お言葉に甘えて、そうさせてもらうよ」
　今晩はエルザも一緒だし、そうそう羽目を外すこともできないだろう、と宇門は心の中で呟いた。
　本物の設計図をもう一度作り直した上で、宇宙空間を飛行できるスペイザーの製作にとりかかる。ベガ星連合軍の基地の位置ははっきりしないが、宇宙空間で迎撃できるならその方がいい。スケジュールを頭の中で組み直して、宇門は立ち上がった。

――完――

## あとがき（ネタバレ注意）

シュバイラー博士が来日して騒動を繰り広げる話です。ＴＯＭ・Ｏさんの２作目に対するお返しのつもりです。

相変わらず、スケベな師匠に宇門博士が苦労してます。プリクラは……70年代には無かったのですが、作中ではあることにしてしまいました。

ってか、シュバイラーのエロっぷりを見せるつもりが、ハードボイルド宇門博士（しかも三枚目半路線）になってしまったのはどうしたものかと……。エロ親父ぶりは、騒動と被害が拡大するきっかけにしかなってません。事件解決の現場でキャラを動かすと、やっぱり忙しくなりますねぇ。エルザはきっちり一番おいしいところを持って行くし。

話の展開が御都合主義的に早いのは……短編だからです（汗）。

元々のアイデアは、単に、巨大なくいだおれ人形が暴れ回るというものでした。何でこんなことを思いついたのかは自分にもわかりません。敵役をどうしようか考えたら、すぐに、ケンタッキーのおじさん、という結論が。この組みあわせで舞台が道頓堀では面白くないから、じゃあ、東京の下町あたりを舞台にしてみたらどうか。どうせなら、みんなが知ってる観光スポットである浅草が壊滅するような大バトルというのはどうだろう……と妄想がふくらみます。ところが、次の問題は、こんなアホなバトルのアイデアをどこでどう使ったらいいのかということだったり。そこで、ＴＯＭ・Ｏさんの、シュバイラー博士がカーネルサンダースに似ている、という指摘がヒントになって、グレンパロディ版の方でやればいいや、ということに。

シュバイラーを模したロボットを作るとしたら、ベガ星連合軍にやってもらうしかない。中にシュバイラー博士を人質に入れて出撃させればものすごくわかりやすい。くいだおれ人形が出てくるには、ロボットを作らなければならないが、これは地球側の仕事になる。しかし、グレンダイザーの基地になってる宇宙科学研究所や、Ｚ、グレートでロボットの運用をしてきた光子力研究所や科学要塞研究所がそんな間抜けなものは作らないでしょう。ということで、ロボット製作は三作品連続して民間人の活動に出し抜かれた日本政府の仕事だよなぁ、と。特に、文部省配下と思われる光子力研究所に手柄を持って行かれて悔しがっていて、かつ、ロボットを作りそうな組織はどこか、と考えると、通産省という結論が。あそこなら機械研とかも持ってたし、ちょうど良さそう。形がくい

だおれ人形になる理由は、自治体のホールとかに一定期間企業の名前をつける権利を販売するというのと同じで、予算不足で表面の塗装をする権利を民間に売却した、という設定にすれば、一応話としては成立しそうだと思いました。

　そうすると、シュバイラーの衣装をまずはカーネルサンダースそっくりにしなければいけないから、どっかで着替えさせないといけません（最初からそっくり、だと物語として安直すぎるし）。じゃあ、元の衣装が盗まれたことにして、スケベオヤジのセンで……で、援助交際の相手にズボンを盗られるってあたりが妥当な線かな、と。シュバイラーが何をしに日本に来るかというと、多分、宇門博士に何らかの技術援助をすることが目的でないと説明ができない。単にズボンを盗られただけでは発展性が無い（笑）ので、技術協力のために何か設計図を持ってきてそれが盗まれる話にしようか。図面ぽいものが盗まれるだけだともう一枚書いて終わりだし、盗んだヤツが簡単に使ってしまいそうでその先の話がない。じゃあ、本物の設計図がズボンの方に隠されていたことにすれば、ズボン捜査イベントをいろいろ書けて楽しいことになりそう。特に、異端だが優秀な宇門博士がズボンを探して現場を走り回る、なんて状況はそれだけでギャグだし……。こんな具合に、まあいろいろイメージをふくらませ、風呂敷を広げる方法を考えたんです。

　リアルくいだおれが閉店してしまったのが唯一の誤算でした。くいだおれ太郎は、友達と一緒に店の前で見たことがあるんですが、共通の知り合いにそっくりな人が居たので、見た瞬間私も友達も店の前で大爆笑してしまいました。

　今回の話は浅草壊滅バトル（というか浅草寺壊滅バトル）になってますが、別に浅草に思うところがあったわけではありません。東京下町のイメージで一番わかりやすいと思ったので登場させただけです。就学旅行の時に雷門を見てから訪れていませんが、そのうち遊びに行きたいと思っています。

　参考までにＡＮＡの時刻表では、東京（GMT+9）〜フランクフルト（GMT+1）間が、たとえば 12:30 発 16:35 着。フランクフルト〜チューリッヒ（GMT+1）間が 19:05 発 20:00 着。全部を GMT に合わせると、東京 3:30〜フランクフルト 15:35 で、所用時間は約十二時間。チューリッヒまでの一時間に乗り換え時間をプラスすると、まあ、最短で十五時間くらいで東京にたどり着けるでしょう。作中時間では、金曜日の昼過ぎにエルザが状況を知ってから飛び出してきたとして、土曜日の昼には日本に着いたというもので、無

茶なスケジュールにはなっていないかと。
密輸で登場する東亜国際物流ですが、現実の会社名とぶつからないように、一応ネット検索して出てこないことを確認しました。もし、ウェブに出てないけど現実にあったらごめんなさい。
この物語は完全なフィクションであり、登場する団体や人物は架空のもので、実在するものとは一切関係ありません。地名とか結構具体的に書いちゃったのですが、その辺は臨機応変にご判断ください。

---

## 元ネタ&ネタバレ集

### 七　誰かが同じ事を言っていた

マジンガーZ 33話の最後で、マジンガーZ改造計画の設計図を奪われた弓教授の台詞。「心配することはない、たとえ設計図は奪われても、もう一枚の設計図がある」「この私の頭の中だよ」

### 三八　かに道楽とかに将軍が……

リアルで起きた事件の経緯は次の通り。昭和三十七年に、かに道楽がマツバガニの動く看板を使用開始。かに将軍が昭和四十七年に、かに道楽とそっくりな動くかにの看板を使用。かに道楽が昭和五十六年に大阪地裁に提訴。一審判決は昭和六十二年五月で、かに将軍に対し、かに看板の使用禁止、撤去と五千万円の損害賠償を命じた。かに将軍は控訴したが、並行して和解交渉をし、看板をタラバガニに変えたので、かに道楽側は看板の使用禁止の訴えを取り下げ、和解金四千万円の支払いと今後はお互いフェアに競争する（看板をまねっこしたりしない）という条件で和解が成立した。これが平成元年十二月のことである。

二〇〇九年　一月四日　ver.1
二〇〇九年　一月六日　ver.2
裕川　涼